

比較文化論

No. 44

日本比較文化学会第 48 回全国大会

2026 年度国際学術大会

発表抄録

於 同志社大学今出川キャンパス

2026 年 5 月 23 日 (土)

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

淡江大学村上春樹研究センター

台湾日本語教育学会

台湾応用日本語学会

日本比較文化学会第 48 回全国大会・2026 年度国際学術大会

会場：同志社大学今出川キャンパス 良心館 1 階、4 階
(〒602-8580 京都市上京区今出川通り烏丸東入)
*京都市営地下鉄烏丸線「今出川駅」下車すぐ

スケジュール：2026 年 5 月 23 日（土）

- 8:20～ 受付（良心館 1 階 RY104 教室前）
9:00～9:50 開会式・総会・臨時理事会（良心館 1 階 RY104）
10:00～11:30 シンポジウム（良心館 1 階 RY104）
テーマ：「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」
11:30～12:30 昼食休憩
12:30～14:00 研究発表【前半】（良心館 4 階 RY420～RY425, RY414～416）
14:00～14:10 休憩
14:10～15:40 研究発表【後半】（良心館 4 階 RY420～RY425, RY414～416）
15:40～16:00 休憩
16:00～16:50 特別講演（良心館 1 階 RY104）
津村宏臣先生（同志社大学文化情報学部教授）
16:50～17:00 閉会式（良心館 1 階 RY104）
17:45～19:45 懇親会（「がんこ高瀬川二条苑」木屋町通二条下ル）

*良心館 4 階 RY418 にお茶やお菓子を用意しております。休憩室としてお使いください。

研究発表者・司会の皆さんへ

- ・研究発表の時間は、発表、質疑応答、交代時間を含め、1 人 30 分以内です。
- ・各教室には Windows の PC が設置されています。事前に送付いただいた PPT データは、大会準備委員会のほうで各教室のパソコンにセットしてあります。ご自身の PC をご使用の場合、機器接続などはご自身でご対処していただきますようお願いいたします。なお、各教室に割り振られている最初の発表者が、その教室のタイムキーパーを担当いたします。第 1 発表者分のみ、各司会者がタイムキーパーを兼ねていただきますよう、お願い申し上げます。
- ・受付時にお申し出いただければ、学内 LAN もご利用になれます。
- ・資料を配布される場合、20 部程度をご自身でご用意ください。

プログラム

開会式・総会・臨時理事会

9:00～9:50 良心館 1 階 RY104

シンポジウム

10:00～11:30 良心館 1 階 RY104

テーマ：「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」

司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

パネリスト：

1. 石井智子（鶴岡工業高等専門学校講師）

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—アルゴリズム社会とインクルーシブ教育—

2. 田島喜代美（常葉大学非常勤講師）

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—国際共創の現場 University of Southeastern Philippines (USEP)との連携を例に—

3. 武富利亜（近畿大学教授）

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—比較文化研究のカギとなる三つの支点：アナログ、デジタル、アップデート—

4. 金学淳（韓国・忠南大学副教授・韓国日本文化学会理事・韓国日本文学会会長）

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—韓国日本文化学会の学術誌 100 号と AI 時代、韓国での日本研究—

5. 葉菱（台湾・淡江大学教授・台湾日語教育学会理事・村上春樹研究センター役員）

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—危機的な時代の逆手にとる行動—

6. 曾秋桂（台湾・淡江大学教授・台湾日本語文学会理事・台湾日語教育学会理事長）

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—「言語学科消滅」の危機を乗り越えるための持続可能な生存戦略—

研究発表

第1分科会（良心館 RY420 教室）

【前半】司会：熊谷摩耶（東北福祉大学准教授）

(1) 12:30～13:00

付潤爽（同志社大学大学院博士前期課程）

中国人日本語学習者の複合動詞の産出に関する習得研究—品詞構造の視点から母語転移を考察する—

(2) 13:00～13:30

彭妍蓁（台湾・嶺東科技大学助理教授）

三世代の女性史として読む坂口禰子「母の像」—明治から昭和における家族規範とジェンダー—

(3) 13:30～14:00

山中香織（京都橘大学准教授）

経営哲学の国際移転と文化的変容—「稲盛経営哲学」受容の日中比較—

【休憩】 14:00～14:10

【後半】司会：中村友紀（関東学院大学教授）

(4) 14:10～14:40

稲生涼子（早稲田大学講師）

オルガン導入開発と学習形態の形成過程—オーラル・ヒストリーからみる「ふしづくりの教育」—

(5) 14:40～15:10

那須野絢子（常葉大学准教授）

駿河湾という思考の場—小泉八雲と三島由紀夫における海の表象—

(6) 15:10～15:40

田中真奈美（東京未来大学教授）

沖縄パラオ友の会の慰霊祭活動と戦争経験の次世代継承

第2分科会（良心館 RY421 教室）

【前半】司会：樋口謙一郎（椋山女学園大学教授）

(1) 12:30～13:00

井原彩樺（同志社大学学士課程）

書き言葉における助詞「は」の意味体系の一考察—BCCWJ「出版・新聞」のデータを用

いて—

(2) 13:00～13:30

中野優子（東北学院大学助教）

西洋由来の死者表象はいかに近代日本に定着したか—デスマスク文化の形成と変遷—

(3) 13:30～14:00

栢山剛（国立都城工業高等専門学校教授）

日露戦争における宮崎の偉人小村寿太郎侯の政治外交政策—外務大臣重光葵と比較しながら—

【休憩】 14:00～14:10

【後半】 司会：伊藤豊（山形大学教授）

(4) 14:10～14:40

Małgorzata Dutka（大阪大学大学院研究生）

アメリカン・フローラル・アート形成におけるいけばなの位相—戦前期の言説を中心に—

(5) 14:40～15:10

横道誠（京都府立大学准教授）

一個性と一回性—思想史とインターネット時代、文学と芸術、対話文化の横断的研究

(6) 15:10～15:40

森下一成（東京未来大学教授）

救済論的パラダイムと社会的レジリエンス—カンボジア大虐殺をめぐって ベトナムとの比較から—

第3分科会（良心館 RY422 教室）

【前半】 司会：轟木靖子（香川大学教授）

(1) 12:30～13:00

程天武（同志社大学大学院博士前期課程）

中国人日本語学習者における条件文と文末モダリティの使用実態と誤用分析—「と・ば・たら・なら」を中心に—

(2) 13:00～13:30

柳燁佳（中国・紹興大学外国語学院専任教師）

外国語初学者にも個人文体があるか？—中国人日本語学習者らの作文を対象として—

(3) 13:30～14:00

江秀姿（台湾・銘伝大学准教授）

翻訳授業におけるディスカッション活動の導入とその効果に関する考察

【休憩】 14:00～14:10

【後半】 司会：柳燁佳（中国・紹興大学外国語学院専任教師）

(4) 14:10～14:40

林琦翔（台湾・淡江大学学士課程・京都橘大学留学生）・北林利治（京都橘大学教授）
DX 教育における生成 AI 利活用意識の二軸分析—日台比較と偏差値層別比較による意識構造—

(5) 14:40～15:10

葉凌（台湾・淡江大学教授）
村上春樹『女のいない男たち』における人間関係

(6) 15:10～15:40

曾秋桂（台湾・淡江大学教授）
村上春樹文学の生死美学—1990年代の創作群から見て—

第4分科会（良心館 RY423 教室）

【前半】 司会：金塚基（東京未来大学准教授）

(1) 12:30～13:00

山本茉莉（びわこ学院大学非常勤講師）
アメリカ大統領 10 名のインタビューにおける天候と時間を表す *it* の指示性と談話的役割

(2) 13:00～13:30

符旖恩（広島大学大学院博士後期課程）
新聞『盛京時報』の児童副刊における児童像から見るプロパガンダ

(3) 13:30～14:00

佐久間浩司（京都橘大学教授）
今日の途上国が経験する成長の壁—先進国と途上国の比較

【休憩】 14:00～14:10

【後半】 司会：三浦秀松（武庫川女子大学教授）

(4) 14:10～14:40

陳由瑋（台湾・国立中興大学人文社会科学前瞻研究センター博士ポスト研究員）
1930 年代日台先住民エリート層における自民族認識とエスニシティの構築—「第一回全道アイヌ青年大会」と「高砂族青年団幹部懇談会」を通して—

(5) 14:40～15:10

長谷川千春（至学館大学助教）

文化表象装置としての対戦格闘ゲーム—『ストリートファイターⅡ』と戦士像の生産・再編—

(6) 15:10～15:40

菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

第一次世界大戦前後におけるドイツ語圏の決闘文化について

第5分科会（良心館 RY424 教室）

【前半】司会：大谷鉄平（北陸大学准教授）

(1) 12:30～13:00

譚梓怡（同志社大学大学院博士前期課程）

AI生成映像を用いたマルチモーダル教材によるオノマトペ習得の促進効果

(2) 13:00～13:30

ヴァシレブ・トドル（神戸大学大学院博士課程）

Cultural Proximity and the Translation of Culturally Presupposed Statements in *Tsurezuregusa*

(3) 13:30～14:00

山崎祐一（長崎県立大学名誉教授・長崎国際大学特任教授）

グローバル社会における英語教育と異文化理解

【休憩】 14:00～14:10

【後半】司会：山崎祐一（長崎県立大学名誉教授・長崎国際大学特任教授）

(4) 14:10～14:40

佐古恵里香（同志社大学助教）

配達物受け渡し場面における授受表現と語用論の検討—アイトラッキングと作文データによる日本人学生の視点取得の分析—

(5) 14:40～15:10

飯田泰弘（岐阜大学准教授）

現実世界に近い英語音声として映画を英語テストに活用する—mMET『素晴らしき哉、人生！』版を例に—

(6) 15:10～15:40

松江夏津紀（京都先端科学大学准教授）

映像メディア素材の学習者適合性（fit）の検証—外国語学習におけるポップカルチャーの教育的資源化：JFLのアニメ活用を例に—

第6分科会（良心館 RY425 教室）

【前半】司会：林裕二（西南女学院大学教授）

(1) 12:30～13:00

張潔旋（同志社大学大学院博士前期課程）

翻訳における動物意象の変容—『紅樓夢』の3訳本の比較分析—

(2) 13:00～13:30

Mo Mo Myint Myat (Student, Aichi University Junior College) ・ Takayo Sugimoto
(Professor, Aichi University Junior College)

Learning Styles and Motivation of Multilingual Learners — A Case Study of
International Students in Japan —

(3) 13:30～14:00

クリストファー・コネリー（京都橘大学専任講師）

How Do Study Abroad Experiences Reshape Japanese University Students' Self-
Expression and Gender Perceptions?—Cultural Dissonance after Return and the Role
of English-Medium Reentry Classrooms—

【休憩】 14:00～14:10

【後半】司会：塩田英子（龍谷大学准教授）

(4) 14:10～14:40

王子涵（同志社大学大学院外国人特別助手）

翻訳の難所における訳の分岐—低類似度文分析と翻訳者クラスターによる差異の可視
化—

(5) 14:40～15:10

林裕二（西南女学院大学教授）

英訳万葉集の防人歌についての一考察

第7分科会（良心館 RY414 教室）

【前半】司会：奥村訓代（北洋大学教授）

(1) 12:30～13:00

屠晨璽（同志社大学大学院博士前期課程）

気づき焦点化サイクルによる日本語アクセント指導の予備的検証—中国語母語話者を
対象に—

(2) 13:00～13:30

森岡千廣（関西大学大学院博士後期課程）

日本文化の理解を目的とした書道ワークショップの設計と実践—日本の学習プロセス「守破離」の体験的理解に着目して—

(3) 13:30～14:00

東本裕子（横浜商科大学教授）

オーストラリア研修に見る学生の英語学習意欲の変化に関する一考察

【休憩】 14:00～14:10

【後半】 司会：東本裕子（横浜商科大学教授）

(4) 14:10～14:40

杉岡歩美（京都橘大学専任講師）

『時をかける少女』に関する一考察—筒井康隆から細田守へ—

(5) 14:40～15:10

陳志文（台湾・国立高雄大学教授）

臨時的な四字漢語動名詞の自他性についての考察—複合語内部と文中機能との乖離を中心に—

第8分科会（良心館 RY415 教室）

【前半】 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

(1) 12:30～13:00

龔歆蔚（同志社大学大学院博士前期課程）

中国人日本語学習者における原因・理由と逆接の接続助詞の習得—テ形の過剰使用に注目して—

(2) 13:00～13:30

李雨点（名古屋大学大学院博士前期課程）

中国人日本語学習者における話し言葉の「たり」の習得実態とその問題点—I-JAS コーパスに基づく日本語母語話者との比較により—

(3) 13:30～14:00

橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

フィクションを教材としたリーディングの授業を通じた日本人英語学習者の語用論的推論能力伸長に関する一考察

【休憩】 14:00～14:10

【後半】司会：橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

(4) 14:10～14:40

大谷鉄平（北陸大学准教授）

カタカナ語に対する意味把握に関する調査報告—「流行」の意味合いを担う複数の語の場合—

(5) 14:40～15:10

高橋栄作（高崎経済大学教授）

生成 AI における関連性理論に基づく推意プロセスの検証と語学教育への応用

第9分科会（良心館 RY416 教室）

【前半】司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

(1) 12:30～13:00

蘇沫涵（同志社大学大学院博士前期課程）

語義指導による語彙的複合動詞の意味推測—「抜く、切る、通す」を例として—

(2) 13:00～13:30

董航（環太平洋大学講師）

多文化共生社会における「文化の発信主体」としての外国人住民—フィリピンにルーツを持つ千葉県市川市長期在住者による実践—

(3) 13:30～14:00

樋口ゆかり（京都橘大学専任講師）

留学中の異文化コミュニケーションによる大学生の自己主張に対する認識の変化—北米に留学した京都橘大学国際英語学部の学生の事例—

【休憩】 14:00～14:10

【後半】司会：郭潔蓉（東京未来大学教授）

(4) 14:10～14:40

黄耀儀（台湾・文藻外語大学助理教授）

宇宙生命観と日蓮主義の交錯—生命主義的救済観からみた西川満の宗教思想—

(5) 14:40～15:10

関口英里（同志社女子大学教授）

国家的祝祭空間におけるキャラクターの意味変容—身体性と受容の再編成をめぐって—

特別講演

16:00～16:50 良心館 1 階 RY104

講師：津村宏臣先生（同志社大学文化情報学部教授）

演題：郷育を鍵にした地域創生スキームの実装—岡山県真庭市北房地区での 10 年間の調査・研究・実践—

司会：山内信幸（同志社大学教授）

《講師紹介》広島県出身。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了。国立歴史民俗博物館情報資料研究部講師、東京藝術大学大学院美術研究科助手などを経て、現在、同志社大学文化情報学部教授。同志社大学文化遺産情報科学研究センターセンター長、真庭市政策アドバイザー（文化政策）などを兼務。同志社大学発ベンチャー株式会社 SOCRAH 代表取締役。共著に『考古学のための GIS 入門』（古今書院）、『生きる場の人類学』（京都大学出版会）、『シークワサーの知恵』（京都大学出版会）などがある。

閉会式

16:50～17:00 良心館 1 階 RY104

シンポジウム「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」
10:00~11:30 良心館1階 RY104 司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

第48回日本比較文化学会全国大会・2026年国際学術会議シンポジウム

テーマ：「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」

司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

日本比較文化学会は1979年に設立され、現在では、常時、会員数500名強を越え、7支部を擁する全国規模の学会へと成長を遂げてきました。また、姉妹学会として、韓国・台湾の関連学会とも活発な相互学術交流を重ね、国際的な学会としての新たな展開を確保しています。幸いにも、第2世代に当たる多くの理事の皆さんとともに、次を担う第3世代の理事・会員の皆さんにも積極的に学会運営を支えていただいています。

今般のシンポジウムでは、第2・第3世代の皆さんから、組織としてあるいは個人として、また、研究面や教育面、さらには、運営面からの多くの提言や振り返りをいただき、各支部ならびに各姉妹学会から多くのご意見を集約することで、本学会がさらなる発展を遂げるための「橋渡し」がスムーズに行われる機会となることを願っています。

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—アルゴリズム社会とインクルーシブ教育—

石井智子（鶴岡工業高等専門学校講師）

これまでの比較文化学では、主に、「自己と他者」、「言語と文化の相違」など、「自己とは異なる世界」を対象に、差異や共通点を理解して受容する過程が研究されてきた。それは、体験を通して、教育や社会での実践をもとに構築されたものである。

しかし、近年、インターネットが普及し、とくに、SNSが発達した現在では、「比較文化」に至る以前に、SNSのアルゴリズム（利用者の履歴から興味や関心を分析）によって、「自分とは異なる価値観」、「反対する意見」など、共有できないものを最初から受け入れない、「自己完結」した世界が形成されている。いわば、フィルターバブルやエコーチェンバーが形成され、自分にとって都合の良い情報や同じ価値観のつながりが強化される一方で、反対の意見は、「ブロック」することが簡単にできてしまう。この「異質性の排除」は、自分とは異なる他者を「比較する」以前にシャットダウンしてしまう危険性がある。

その点を踏まえ、「次世代の比較文化研究」として、差異に触れない、異文化と接しないという「比較すること」、「検討すること」以前の自己完結型の情報システムを問題提起していきたい。先ほど述べた「自己完結」は、自らの正当性を主張し、異なる見解を排除するという「二項対立」的な思考とも捉えることができ、現代の「分断の時代」を象徴している。また、生成AIの登場により、文章・翻訳・画像作成において、数日かけて比較、検討していたあらゆるものが瞬時に生成可能となっている。

ここで注目したいことは、「比較・検討」をする「手間・労力」の喪失である。本来、比較検討する時間や手間によって、ゆっくりと理解し、受容していたあらゆる「もの」に対し、現在は、いかに手間をかけることなく、「タイパ」、「コスパ」でスマートに効率よく進められるかが重視され、「手間をかける学び」が軽視されている風潮がある。それは、学生の学習環境にもあらわれ、いかに時間や労力をかけずに効率よく学べるかが一つのポイントになっている。

比較文化研究とは、文化の違和感やズレなどと向き合い、「わからないこと」に時間をかける「非効率な作業」を含むものである。「わからないこと」に手間や時間をかけることが軽視される傾向は比較文化研究のみならず、教育学全体の危機であるともいえる。

このような現状を考慮して、異文化、他者理解の可能性として、「インクルーシブ教育」との接続を試みたい。インクルーシブ教育は、多様性を尊重する、即ち、異質も同質も受け入れる環境の下に行う教育である。それは、SNSアルゴリズムの「異質性の排除」とは真逆の性質を持つものである。この視点から、私は、研究テーマである新渡戸稲造の「遠友夜学校」を先行モデルとして、「排除しない教育」と「異文化を学ぶ教育」、その教育姿勢について検討する。それは、現代における比較文化の再構築へ向けた手掛かりとなりうるであろう。

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究

—国際共創の現場 University of Southeastern Philippines (USEP)との連携を例に—

田島喜代美（常葉大学非常勤講師）

日本比較文化学会が創設以来、全国規模の学術組織へと発展し、韓国・台湾の姉妹学会との交流を通じて国際的展開を深化させてきた今日、私たちに求められているのは、研究成果の継承にとどまらない「世代間の接続」の構築である。本報告では、フィリピン・ダバオ市の University of Southeastern Philippines（以下、USEP）との研究・教育連携の実践を手がかりに、「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」の具体像を提示する。

USEPは、ASEAN地域およびその先の社会変革を担う先導的研究大学であり、革新的な教育プログラム、社会実装を志向した研究、地域経済を力づけるコミュニティ支援、持続可能な資源管理を通じて、包摂的成長と持続可能な発展に貢献している。国際化された教育・研究体制のもと、研究開発を育む環境を整備し、実践的かつグローバルに通用する人材を育成している点に特徴がある。

同大学において特筆すべきは、若手研究者が主体となり、大学の研究資源を地域社会の課題解決へと結びつけている点である。とりわけ、IP (Indigenous Peoples) の文化的視座を踏まえ、多文化共生の在り方を再考する試みは、理論と実践を往還する比較文化研究の新たな可能性を示していた。そこでは、既存の理論的枠組みを地域実践と照合しながら再構築し、若手研究者の取り組みを学術的に位置づけ直すことで、共創的に知を形成する構図が形成していた。この経験から、本学会の発展に向けて、三点を提言したい。

第一に、運営面における官学・NPO・大学を横断する連携体制の構築である。発表者は、独自に大学研究者を中心とする非営利法人を設立し、公的機関および民間双方の支援を得ることで、学会の既存の枠組みだけでは実現が難しい国際フィールドを形成した。行政、大学、民間組織がそれぞれの強みを持ち寄る重層的な協働枠組みは、若手が外部資源を携えた独立的パートナーとして参画することを可能にし、学会運営に新たな機動力と持続性をもたらす。第二に、教育面でのPBL型共同研究の構築である。これまでに積み重ねられてきた理論的蓄積と次世代の実践的取り組みが交差することで、新たな問いが生成される。学会は、今後、完成された知を披露する場にとどまるのではなく、世代を超えて社会課題に取り組む学習共同体としての機能を強化していく必要がある。第三に、研究面における社会実装への責任である。比較文化研究は論文発表で完結するのではなく、多様な社会的文脈を読み解き、それを理論化し、再び社会へと還元する循環の中で深化していく。

「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」とは、過去の蓄積を継承するだけでなく、現代の社会的課題に応答しながら世代をつなぐ動的な仕組みを構築する営みである。本報告が、第2世代から第3世代へと連なる接続を促し、本学会が、研究・教育・運営の三位一体のもとで、持続的に発展していくための一助となることを期待したい。

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—比較文化研究のカギとなる三つの支点：アナログ、デジタル、アップデート—

武富利亜（近畿大学教授）

2000年、ミレニアム・バグをめぐる不安とともに始まった新世紀から四半世紀が経過した。Amazon.co.jpの設立、iモードや3Gの開始、SNSの普及、そして、2022年のChatGPT公開に至るまで、デジタル技術は、コミュニケーション様式と知の流通構造を根底から変えてきた。かつて国際交流は物理的移動を前提とし、発信の主体も研究者やメディアに限られていたが、現在では、誰もが発信者となり、生成AIが知的活動の一部を担う時代に入っている。本シンポジウムでは、こうした環境変化のなかで、「次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究」はいかに構築されるのかを考えたい。カズオ・イングロの『遠い山なみの光』とその映画化作品を一例として取り上げ、原作が保持していた曖昧さが、映画において、歴史的な文脈と結びつき、可視化された意味を提示しながら議論を進める。

1952年の日本、とりわけ、長崎は、朝鮮戦争特需の恩恵を受けた者と受けられなかった者とのあいだに深刻な格差を抱えていた。重工業の復活や団地文化の形成によって表面的には復興と繁栄が進む一方、その波に乗れなかった人々は、依然として、極度の貧困状態に置かれ、被爆者や基地周辺に生きる女性たちは、強い差別の対象となった。映画は、こうした歴史的現実を背景として、小説では明示されなかった側面を浮かび上がらせる。主人公の悦子は、被爆者であったこと、貧困のなかで生きていたこと、さらには、娘に対して殺意を抱いた可能性までもが、一定の解釈可能なかたちで提示されるのである。イングロがこの作品の映画化を承認した背景には、戦後日本が抱えてきた光と闇の両面を、次世代に向けて、視覚的に提示する必要性への意識があったと考えられる。

以上を踏まえ、「比較文化研究のカギとなる三つの支点—アナログ、デジタル、アップデート—」を提示したい。第一に、原書や写真、一次資料といった現物のアナログ資料を丁寧に読み解き、歴史の具体性を失わないことである。第二に、それらをデジタル化し、視覚的資料として提示することで、同時代の出来事を現在の受け手に可視化することである。そして、第三に、研究対象だけでなく、研究者自身が認識枠組みを更新し続ける姿勢である。次世代の比較文化研究は、この三つの支点が相互に支え合うときにこそ成立すると考える。

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—韓国日本文化学会の学術誌 100号と AI 時代、韓国での日本研究—

金学淳（韓国・忠南大学副教授・韓国日本文化学会理事・韓国日本文学会長）

1993年、韓国の中部地域である忠清道を基盤にして設立されたのが、韓国日本文化学会である。1996年4月、創立総会と第1回学術大会を開催し、正式な学会として発足した。現在は、大田・忠清地域の拠点学会としての地位を確固たるものにしていく。『日本文化学報』第1巻から第100巻まで、掲載された論文は1,895件であり、これを対象に、発行年、研究分野、研究者の地域（国内/海外）分布などの定量分析と企画論文の動向、質的水準向上のための努力などを分析し、その結果を示すことにする。

最近、韓国の社会及び教育においての話題は、もちろん AI である。現在の政権では、国家戦略政策として、AI 高速道路というキャッチフレーズを掲げて、支援を拡大している。最近、日本研究の状況を見ると、まず、韓国日本学会では、『韓日デジタル人文学の最前線』（2025年12月）という共著を出版し、日本語、日本文学、日本学などにおいて、デジタルと生成界アプリを活用し、学術研究を行った論文をまとめている。具体的な論文のタイトルは、以下の通りである。

「日本文化資源デジタルアーカイブの DX バーチャル京都による空間人文の展開」、「データモデリングを通じて見た 18 世紀の日本文人ネットワーク：文人交遊録『在津紀事』を中心に」、「デジタル時代の文学観光研究：日本の作家追跡型文学観光のビッグデータ分析とデジタル地図の可視化を中心に」、「テキストマイニングを活用した日韓対照研究の動向の分析」、「デジタル人文学の手法を通じて考察した「多文化共生」と在日コリアン：1990 年以降朝日新聞のデータベースを中心に」、「デジタル人文学における基盤データの役割」、「カルチャーマイニングとデジタル人文学：データ時代の文化を読む」、「日本古典学とデジタル人文学：物語の伝承・表現史研究の視座で」、「デジタル人文学の視点に基づく人間中心の AI 教育とクリエイティビティ・ラーニング」などの研究である。

韓国日本語教育学会の学術論文集（114 輯、2025 年 12 月）では、企画論文として、4 つの論文を挙げている。それは、以下の通りである。「バーチャル京都による歴史都市の時空間復原と空間人文学の展開（矢野桂司）」、「日本古典文学の授業における生成 AI の活用（片龍雨）」、「デジタルメディアプラットフォームを活用した日本文化教育方法論の研究（林ダハム）」、「デジタル時代における日本の古典の AI 化と方向性：日本の古典に関連する AI 認識プログラムの活用（金学淳）」であり、地域学会の研究でも、AI を主に採用している。

さらに、発表者が学会長を務めている韓国日本文学会での研究動向、韓国研究財団主催の人文社会デジタル融合人材養成事業、在朝日本人を対象にした地域中心の研究会、大田の都市建築と地域ブランディングのためのアーカイブ作成などを通し、現在の韓国における次世代のための研究状況と方向性を考察する。

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—危機的な時代の逆手にとる行動—

葉凌（台湾・淡江大学教授・台湾日語教育学会理事・村上春樹研究センター役員）

台湾の高等教育が現在直面している問題は、大きく二つある。第一に、少子化、第二に、AI技術の急速な発展である。台湾の教育部（文部科学省に該当）の予測によれば、2028年度の大学新入生数は17万人にまで減少し、現在、およそ50校ある私立大学のうち、40校がその影響を受けるとされている。日本と同様、私立大学の経営環境が一層厳しくなる。学生数の減少は、教員数の削減に直結し、とりわけ、日本語教育などの文系分野において、その影響は顕著である。その結果、若手の研究者の育成や研究の継承が困難になりつつある。

こうした状況に追い打ちをかけるのが、AI技術の発展である。翻訳や外国語教育が大きな影響を受けていることは言うまでもなく、大学生によるAI使用の不正行為も日常的な課題となっている。

台湾では「危機は転機である」という言葉がよく用いられる。このような危機的な状況において、変化に抗うことではなく、その状況を「逆手にとる」ことである。つまり、少子化やAI技術の発展を転換の契機として捉え直す思考こそが、次世代につながる鍵となる。

まず、教員としての立場から、次世代の教育の可能性を考えたい。少人数のクラスが当たり前となる時代において、学生一人ひとりと質の高いコミュニケーションが可能になる。知識を一方向的に伝達する教育から、学生が学習の主体となり、個人差を尊重する教育への転換が求められる。そのためには、時間と労力が必要となるが、その補助として、AIの活用が重要である。例えば、Padletのような教育特化型AIの利用である。台湾教育部の「教学実践研究計画」において、英語学習や情報工学分野での応用例が報告されている。少子化の時代に、AIを用いて「質」を重視した教育が可能になる。

次に、研究者として次世代の研究の可能性を考えたい。先行研究の整理や把握には NotebookLM のようなアップロードされた資料のみを対象とする AI ツールが有効である。要点要約のほか、先行研究の比較や共通点の抽出などの前段階の作業を支援することで、研究者は、解釈や思考により多くの時間を割くことができる。もちろん、AI が生成した資料の最終確認は、研究者自身が担う必要がある。教員削減により、事務負担が増大する現状において、「質」の高い研究活動のサポートとなる。

以上のように、教員として、研究者として、「質」の高い行動を確立し、それを次世代へと引き渡していくことが求められている。時代に抗うのではなく、その特徴を読み取り、利用することがポイントである。危機的な状況を逆手にとることこそが、次世代につながる比較文化研究の真髄であろう。

次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究
—「言語学科消滅」の危機を乗り越えるための持続可能な生存戦略—

曾秋桂（台湾・淡江大学教授・台湾日本語文学会理事・台湾日語教育学会理事長）

台湾では、例年、20万人以上の若者が大学進学を予定していたが、2025年の出生数は10万人を割り込むと推定されている。現在の慣例に基づけば、国立大学が約12万人の合格枠を確保した後、残りの志願者が私立大学へと割り振られる。この構造的変化により、台湾の高等教育は、未曾有の危機に瀕しており、特に、私立大学にとっては、まさに「死活問題」と言える現状である。

その象徴的な事例として、淡江大学外国語学部では、114学年度（2025.8-2026.7）より定員割れに伴う統廃合が行われ、従来の6学科を3学科へと削減する措置を講じた。さらに、AI技術の急速な進化により、これまで言語教育が担ってきた「聞く・話す・読む・書く・訳す」の5技能の大部分が代替されつつある。このように、少子化とAIという二重の打撃を受けた言語学科は、あたかも津波の直撃を受ける「最前線」に立たされており、消滅の危機に直面している。本報告では、この危機を単なる終焉ではなく、「転換点」と捉え、学問領域の再定義と持続可能な生存に向けた機会として捉えることを主眼とする。

言語教育が「単なる道具としての言葉」を教える段階に留まるならば、AIによる淘汰は避けられない。しかし、AIリテラシーとAI応用力を視野に入れ、言語学習の背後にある文化理解や多角的な視点、異文化間調整能力を重視する「比較文化学習・研究」を取り入れることができれば、それは強力な生存戦略（武器）となり得る。

具体的に、持続可能な発展に向けて、三つの柱をなした生存戦略をここに提案したい。

まずは、「言語習得」から「文化的調整能力」への再定義のことである。比較文化学習・研究を通じて培われる「多角的な観察力」、「文脈を踏まえた理解力」、「異文化間の調整能力」を備えた人材こそは、社会が必要とする高度な人文的教養を持つ学習者である。

次は、学問の壁を越えた横断的カリキュラムの構築のことである。従来の縦割り教育から脱却し、AI技術を導入し、比較文化を軸に、ビジネス、観光、デジタル・ヒューマニティーズ（DH）、人文学デジタル・トランスフォーメーション（DX）などと連携することにより、卒業生の就職競争力を高めることに繋がる。

最後は、次世代研究者のポスト確保と役割の創出のことである。若手教員のキャリア形成を大学内だけに限定せず、企業、自治体、国際機関の文化コンサルタント、地域コーディネーターとしての役割を創出すると、学術研究を学外のエコシステムと接続させることが、厳しい生存戦の突破口ともなり得る。

要するに、言語学科の消滅への懸念を高等教育の持続可能性を問い直す契機としなければならぬ。市場原理による淘汰が進む中、AIと協働しつつ、人間にしかできない文化の「翻訳」と「調整」を担う新たな学問の姿を提示すべきである。これこそ、AI時代に求められる次世代の、次世代による、次世代のための比較文化研究の使命であると確信している。

研究発表

第1分科会 良心館4階 RY420

【前半】12:30~13:00 司会：熊谷摩耶（東北福祉大学准教授）

中国人日本語学習者の複合動詞の産出に関する習得研究 —品詞構造の視点から母語転移を考察する—

付潤爽（同志社大学大学院博士前期課程）

本発表は、中国人日本語学習者（CJL）が複合動詞を使用しない理由について、日中両言語における複合動詞の対応関係を分析することによって、CJL に対する複合動詞の効果的な指導のための示唆を得ることを目的としている。

先行研究として、高（2018）は、母語の影響が産出困難につながる可能性があるとは指摘しているため、母語転移の視点から、CJL が複合動詞の産出困難に関する原因を明らかにする必要がある。

そこで、本発表の予備調査として、母語転移を品詞構造の視点から分析してみると、日本語の複合動詞はすべて「V1+V2」であるが、中国語の複合動詞は3タイプの品詞構造になっていることが判明する。タイプ1では、日本語と中国語の両語ともに、「V1+V2」という構造を持っており、CJL にとって、最も複合動詞の産出が容易なタイプであると考えられる。しかし、このタイプ1では、複合動詞が中国語に翻訳される際に、前後どちらか一方の意味しか保持されない場合があり、その影響で、CJL は、複合動詞の代わりに、単純動詞（前項または後項のみ）を好んで使用する傾向が見られる。タイプ2では、日本語に対する中国語訳が「単純動詞+他の成分」になっているため、CJL がこのような対応関係に従って産出すると予測できる。タイプ3では、日本語に対して、その中国語訳が文になっているため、CJL が文の形式で産出すると推測できる。このような多様な品詞構造の異同が、CJL が複合動詞の産出に困難さを伴う一因であると考えられる。

研究方法として、まず、「複合動詞レキシコン」から約2700の複合動詞について、3タイプに分類し、BCCWJを通して、それぞれの使用頻度を調べ、使用頻度の高い順によって、複合動詞を取り出す。次に、実験群として、CJL（日本語能力試験N1合格者）80名を対象とし、統制群として、30名母語話者を対象に調査する。事前テストを通じて、既習語彙を調査対象語として選出し、許容度テストを行う。

研究結果から、CJL は、母語話者との対比で、複合動詞使用の違いを意識することが判明する。CJL が、母語転移において、どのような影響を受けているかを明らかにすることによって、CJL がどのようにより自然な日本語を産出できるようになるのかを分析・考察する。

【参考文献】

高娟. (2018) 「作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析」『日本語・日本文化研究』(28), pp.64-71.

研究発表

第1分科会 良心館4階 RY420

【前半】13:00~13:30 司会：熊谷摩耶（東北福祉大学准教授）

三世代の女性史として読む坂口禰子「母の像」
—明治から昭和における家族規範とジェンダー—

彭妍蓁（台湾・嶺東科技大学助理教授）

本発表は、坂口禰子の長編小説「母の像」（一九七〇年）を対象に、母マキ、娘令子、そして息子の妻恵子という三世代の女性を通じて、明治から昭和に至る家族規範の変容を考察する。坂口禰子は、日本統治下台湾を描いた作家として知られるが、戦後の長編作品については、検討が不十分である。

第一世代のマキは、明治期の士族精神を保持し、米騒動や夫の闘病という困難に際しても、自律と矜持を失わなかった。令子の記憶において、彼女は「理想的な母」として神聖化され、生涯にわたって追い求める規範となる。第二世代の令子は、植民地台湾と戦後日本という二つの時空間を生きる。台湾時代は過敏な母性に苦悩し、戦後には息子たちの学生運動参加を通じて世代間の断絶を痛感する。だが、晩年、宇野との関係や台湾再訪を契機として、母性規範の呪縛から徐々に解放されていく。

第三世代として分析するのは、令子の実の娘ではなく、息子の妻である恵子である。実の娘の不在は、マキから令子へと流れてきた血縁継承がここで断絶することを意味する。核家族規範のもとで育った恵子は、令子の植民地記憶や伝統的な「家」の観念を共有しない。この断絶は、戦後における家族の在り方が根本的に変わったことを示している。

分析にあたっては、作中で繰り返される「血」という言葉に注目する。また、母の看取りを描く第一章と家族史を遡及する第二章以降の重層的な構成が、明治から昭和への変遷と血縁継承の断絶を同時に浮かび上がらせることを明らかにする。本研究は、坂口禰子の戦後長編を取り上げ、「娘の不在」を血縁継承の断絶として分析することで、戦後日本における家族変容を文学から明らかにする。

研究発表

第1分科会 良心館4階 RY420

【前半】13:30~14:00 司会：熊谷摩耶（東北福祉大学准教授）

経営哲学の国際移転と文化的変容 —「稲盛経営哲学」受容の日中比較—

山中香織（京都橘大学准教授）

京セラ創業者・稲盛和夫氏が確立した稲盛経営哲学は、盛和塾に代表される実践共同体を通じて継承され（山中, 2024）、心を高めることと経営成果を結びつける思想として理解されてきた。一方、中国では、主に、急成長企業の部門別採算制度としてのアメーバ経営が先行して導入され、経営管理技法として受容される事例が多く指摘されている（劉, 2018）。こうした理解は、日中における稲盛経営哲学の受容を対置的に捉える傾向があり、その文化的意味付けや実践のされ方の差異を十分に説明しているとは言い難い。本研究では、2025年3月に実施したアンケート調査データを用い、2019年盛和塾解散後の後継塾生（401名）と中国盛和塾生（759名）を比較し、稲盛経営哲学の受容および実装の文化的差異を検討する。研究課題は、①稲盛経営哲学が日中でそれぞれどのように理解され、意味付けられているか、②その哲学は経営者個人・組織レベルにおいてどのような実践様式として作動しているか、③これらの差異は文化比較論の視点からどう説明できるかという3点である。分析においては、塾生属性、入塾後の変化認識、フィロソフィ教育や経営体験発表といった実践行動や学習の意味付けに注目し、記述的比較と文化比較論に基づく解釈を行う。分析手法は、記述統計に基づく比較分析と文化比較論を用いた解釈的分析を組み合わせ、その上で、Hofstede et al. (2010) による文化次元論、Hall (1976) の高文脈／低文脈文化論、Meyer (2014) の文化差フレームを参照し、各文化圏における稲盛経営哲学の理解および実装様式を解釈する。以上により、本研究では、稲盛経営哲学が日中で普遍的価値を共有しながらも、各文化の価値観や行動様式に応じて、意味付けや実践形態を変えながら作動する実践知であることを明らかにする。また、稲盛経営哲学の国際的展開を、単なる経営手法の移転ではなく、「フィロソフィ・制度・文化」の相互作用として捉える比較文化論の視座を提示する。

【参考文献】

Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. Anchor Books.

Hofstede, G., Hofstede, G. J., Minkov, M. (2010). *Cultures and Organizations: Software of the mind*, (3rd ed.). McGraw Hill.

Meyer, E. (2014). *The Culture Map: Breaking through the invisible boundaries of global business*. PublicAffairs.

劉美玲. (2018). 「アメーバ経営に関する実証研究：中国企業のデータによる分析」神戸大学大学院経営学研究科.

山中香織. (2024). 「実践共同体における経営者の学習—『盛和塾・大阪（大和）』で学ぶ食関連企業の事例分析—」立命館大学大学院食マネジメント研究科.

研究発表

第1分科会 良心館4階 RY420

【後半】14:10~14:40 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

オルガン導入開発と学習形態の形成過程 —オーラル・ヒストリーからみる「ふしづくりの教育」—

稲生涼子（早稲田大学講師）

本発表は、戦後学校での音楽に関する授業において、オルガンの導入・開発が学習形態の形成にどのように関与していたのかを、オーラル・ヒストリーの手法を用いて明らかにするものである。対象とするのは、1960年代後半から1970年代にかけて、岐阜県古川郡古川小学校で実践された「ふしづくり一本道」（以下、「ふしづくりの教育」と示す）とその教育を継承した関連実践である。「ふしづくりの教育」とは、「ふしづくり（創作）を核にして、子どもたちに音楽的能力の保障しようとするメソッド」である（八木 2004, p.676）。

同実践は、一斉授業の学習効果に対する批判を背景とし、個人、ペア、グループといった多様な学習形態を授業に位置づけ、学習者一人ひとりの表現の多様性を保障しようとした点に特徴がある。先行研究では、授業内容や実践を担った教員の教育観に焦点を当てた検討がなされてきた一方で、学習形態の成立に関与した楽器の構造や使用条件のような物的要因が与える影響については、十分に議論されてこなかった。具体的には、「ふしづくりの教育」では、鍵盤ハーモニカに限らず、ハーモニカ、リコーダー、オルガンなど複数の楽器が用いられるが（岐阜県古川小学校 1975, p.20）、中でも、当時のオルガンは、「ふしづくりの教育」における学習形態を支える要素でありながら、持ち運びの可能なハーモニカやリコーダーと異なり、その展開に一定の物理的制約を与えていた楽器であったと考えられる。

そこで、文献資料や実地調査に加え、当時の実践側および開発側の当事者への聞き取りから得られたオーラル・データを史料として整理・分析した。その結果、「ふしづくりの教育」における学習形態は、オルガンの構造や機能、可動性、同時演奏の可能性といった物的条件と相互に影響し合いながら展開していた様が、詳らかになった。

本発表は、オーラル・ヒストリーを用いることで、文献資料だけでは見えにくい、オルガンと学習形態との関係を明らかにし、学校現場の実践がどのように形づくられてきたのかを捉え直す点に意義がある。

【参考文献】

岐阜県古川小学校. (1975). 『ふしづくりの教育：主体的で楽しい音楽教育の実現をめざして十年』 東京：明治図書出版.

酒井順子（訳）. (2002). 『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』 東京：青木書店.

Thompson, P. (2000). *The Voice of the Past: Oral history* (3rd ed.). Oxford: Oxford University Press.

八木正一. (2004). 「ふしづくり一本道」『日本音楽教育学事典』 東京：音楽之友社, p. 676.

研究発表

第1分科会 良心館4階 RY420

【後半】14:40~15:10 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

駿河湾という思考の場

—小泉八雲と三島由紀夫における海の表象—

那須野絢子（常葉大学准教授）

本研究は、駿河湾という地理的空間が、近代文学の作家にとって「思考の場」としていかに機能してきたのかを、小泉八雲と三島由紀夫の作品の考察から探るものである。海は、しばしば、先行研究において、無常や死、無限性といった普遍的象徴として論じられてきたが、具体的な場所性に関しては、その象徴の中に回収されがちであった。本研究は、こうした傾向に対し、特定の海（駿河湾）の文学に焦点を絞ることで、「海一般」では捉えきれない、文学を生み出す思考の「場」としての海を考察するものである。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、1850-1904）は、静岡県焼津の海を熱心に取材し、この海を舞台とした“*At Yaidzu*”（1899），“*Drifting*”（1901），“*Beside the Sea*”（1901），“*Noctiluca*”（1900）を記した。八雲は、弱い視力のために鋭敏となった聴覚をもって、駿河湾の波の轟きを聞き、海と一体になり、自身の死生観を昇華させることに成功している。その結果として結実したものが、上記の作品群である。

一方の三島由紀夫（1925-1971）は、人生最後の作品となった『*天人五衰*』（1971）において、駿河湾の海を描いている。この作品における駿河湾は、固有の土地としてではなく、観念化された空間として提示される。しかし、その観念化された空間を生んだ背景には、主人公が見た静岡県の清水に位置する海岸の高台から望む海と、その向こうに浮かぶ伊豆半島のランドスケープによって得ることができた思考があったのであり、これは、作者三島の終末論的世界観を支える結果となった。

このように、本研究では、同じ海が、八雲及び三島の再晩年の作品において、彼らの文学的思想を生む場として機能していることに注目する。そして、駿河湾という具体的な土地が、作家の思考や感受性、さらには、文学的表象の形成にどのように関与しているのかを、複数の作品の比較分析を通して明らかにすることを目的とする。

なお、八雲と三島はいずれも静岡県を避暑地として選び、晩年の数年間、亡くなる直前まで静岡の土地に親しみ、作品のインスピレーションを受けている。本研究では、この事実を伝記的因果としてではなく、同地が両者にとって思考と執筆の場として選択されていたことを示す補助的な徴として位置づける。

研究発表

第1分科会 良心館4階 RY420

【後半】15:10~15:40 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

沖縄パラオ友の会の慰霊祭活動と戦争経験の次世代継承

田中真奈美（東京未来大学教授）

はじめに

第一次世界大戦後のパリ講和会議により、パラオを含む南洋群島は、日本の委任統治領となった。その後、同地域では、経済・産業開発が進展し、国内の困窮を背景に多くの日本人が移住した。当時の日本人移住者は、現地住民との交流が限定的で、日本人社会を中心に生活していたとされる。しかし、終戦後に日本へ引き揚げた後も、パラオとの精神的なつながりを保持し続け、慰霊祭などの活動を通じて戦争体験の記憶を継承してきた。

本研究は、パラオでの経験がどのように語り継がれ、継承されているのかを明らかにすることを目的とし、沖縄のパラオ友の会の会員に対して、聞き取り調査を実施した。

研究方法

2022年から2025年まで、毎年1回毎月8日に開催されるパラオ友の会の月例会を中心に視察し、パラオ友の会の会員に聞き取り調査を行った。視察から得られた情報と聞き取り調査の結果から、慰霊祭の活動を中心に検証し、分析・考察した。

結果

調査の結果、パラオ友の会では、戦没者追悼と平和継承を目的とした慰霊祭が継続的に実施されていることが明らかとなった。毎年6月23日の「南洋諸島慰霊の日」には、沖縄県平和祈念公園で慰霊祭を開催し、さらに、4年に1度パラオ、2年に1度日本国内各県で慰霊行事を行っている。パラオでは、アンガウル島、ペリリュー島、コロールに慰霊碑が建立されており、1968年の第1回以降、約40回にわたり、現地慰霊祭が継続されてきた。

聞き取りでは、「パラオで生き延びたことへの感謝」や「家族全員で帰還できた幸運」などの語りが多く、これらの経験が慰霊祭実施の動機として機能していることが示された。

また、2024年には、パラオの慰霊碑の老朽化が判明し、募金活動によって修復が実現した。修復後の2025年12月には、訪問団がパラオを訪れ、三地域の慰霊碑で慰霊祭を実施した。これらの活動は、慰霊碑の維持を通じて、戦争の記憶を次世代へ継承する役割を果たしており、会員の「戦争のない平和な生活を次世代に強く言い聞かせたい」という語りからも、会員が平和継承を重視している姿勢が確認できた。

考察・まとめ

本研究から、パラオで戦前・戦中・戦後を経験した人々にとって、戦没者の供養と戦争体験の継承が重要な意味を持つことが明らかとなった。会員の語りには、生存への感謝や家族と共に帰還できたことへの思いが示され、これらが慰霊祭を継続する動機となっている。また、定期的な慰霊祭の実施に加え、戦争体験をメディアに積極的に語る姿勢が特徴的である。こうした取り組みは、戦争の記憶を風化させず、次世代へ継承するための重要な実践として位置づけられ、地域社会における平和教育にも寄与していると考えられる。

研究発表

第2分科会 良心館4階 RY421

【前半】12:30~13:00 司会：樋口謙一郎（相山女学園大学教授）

書き言葉における助詞「は」の意味体系の一考察
—BCCWJ「出版・新聞」のデータを用いて—

井原彩樺（同志社大学学士課程）

従来から、助詞「は」の意味体系について、様々な説が提唱されており、曖昧性や課題が指摘できる。例えば、中学国語教育における学校文法参考書（田近（2012）、文英堂編集部（2021）、学研プラス（2018））を確認すると、「主題」、「強調（取り立て）」、「他との区別」、「繰り返し」のうち、すべての意味項目の記載が認められるのは、田近（2012）のみで、文英堂編集部（2021）は、「主題」を記載していない。しかしながら、学研プラス（2018）は、「主題」の意味のみを明示的に記載している。このように、助詞「は」に関しては、中学国語教育における学校文法参考書において、意味項目の記載に揺れが認められ、詳細な用例を確認しても、意味判別の基準の不明瞭さが指摘できる。

さらに、助詞「は」の先行研究に着目すると、例えば、寺村（1991）では、「取り立て（強調）」の意味を持つ取り立て助詞を用いるかどうかという判断は、「談話法的条件」によるとされているが、「談話法的条件」の定義については、明確な定義づけは行われていないという点が指摘できる。また、北原（1981）は、「取り立て（強調）」を「叙述中のある部分（とりたてられる部分）を特に問題にすること」（p. 265）としているが、この「特に問題にする」という判断は何によって行われるかについては言及されていないという点が指摘できる。この判断基準には、寺村（1991）の「談話法的条件」が該当すると考えられるが、前述の通り、「談話法的条件」の定義には再検討の余地がある。

これらの課題を踏まえ、本発表では、寺村（1991）で示された「談話法的条件」を援用した『引き立て』の生起条件の定義を行い、助詞「は」の上位意味項目が「引き立て」であることを示すことを目的とする。そして、その検証に向けて、まず、関連性理論と認知言語学の知見に基づいて、「産出過程と理解過程」を設定し、『引き立て』の生起条件（寺村（1991）における「談話法的条件」）を提示する。最終的に、この条件に助詞「は」が該当するかどうかについて、BCCWJのコアデータのうち、「出版・新聞」を用いて、実際の用例と照応し、本発表で主張する意味体系の網羅性を検証する。

【参考文献】

- 文英堂編集部（編）. 2021. 『これでわかる 中学国文法』 京都：文英堂.
学研プラス（編）. 2018. 『中学国語 文法（全問ヒントつきで ニガテでも解ける）』 東京：学研プラス.
北原保雄. 1981. 『日本語の世界6 日本語の文法』 東京：中央公論社.
田近洵一. 2012. 『くわしい 中学国文法（中学くわしい）』 京都：文英堂.
寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』 東京：くろしお出版.

研究発表

第2分科会 良心館4階 RY421

【前半】13:00~13:30 司会：樋口謙一郎（相山女学園大学教授）

西洋由来の死者表象はいかに近代日本に定着したか —デスマスク文化の形成と変遷—

中野優子（東北学院大学助教）

なぜ日本近代において、死者の「顔」を型取り保存するという実践が生まれたのだろうか。デスマスクは、古くから西洋に由来する死者表象として知られるが、日本におけるデスマスク受容は、単なる西洋の模倣では説明できない独自の展開を示す。

本研究は、日本近代におけるデスマスク文化の形成と変遷を、デスマスクがとられた人物の具体的事例の総覧的整理と分析を通して明らかにするものである。これまでの筆者による調査にて確認された日本でとられたデスマスク事例を分類し、誰の発案によって、いかなる動機のもとで、デスマスク制作が企図されたのかに着目して分析を行った。その起点として、日本で最初にデスマスクがとられた夏目漱石（1867-1916）の事例は、門下生・森田草平（1881-1949）の発案によるものであり、当時、知識人の間で話題となっていたベートーヴェンのデスマスクの受容が背景にあったことが確認されている。

分析の結果、デスマスクがとられた人物は、文化人や政治家に集中しており、とりわけ、文士や芸術家といった知識層に偏在していることが明らかとなった。また、制作を担ったのは、洋行経験を持ち、西洋美術に通じた彫刻家であり、彼らを媒介として西洋的な「偉人崇拜」の価値観が日本社会に移入されたことが示された。制作動機については、弟子や近親者による故人への崇拜意識が重要な役割を果たしていたことが浮かび上がり、明治日本における強固な師弟関係がデスマスク制作を支える背景として位置づけられる。

さらに注目すべき点として、デスマスクが仏式葬儀と時間的に並行して行われていたにもかかわらず、宗教者の関与が確認されない点が挙げられる。このことから、デスマスクは、宗教的儀礼とは切り離された、非宗教的かつ個人的な記憶の媒体（近親者や門下、友人らによる「永遠の記憶」や「偉人崇拜」とする目的）として機能していたと考えられる。

当日の発表では、こうした事例を総覧的に整理し、日本近代におけるデスマスク文化の全体像とその歴史的・文化的意義を明らかにする。また、典型例とイレギュラーな事例紹介とともに、筆者が撮影した写真と併せて提示する。

研究発表

第2分科会 良心館4階 RY421

【前半】13:30~14:00 司会：樋口謙一郎（相山女学園大学教授）

日露戦争における宮崎の偉人小村寿太郎侯の政治外交政策
—外務大臣重光葵と比較しながら—

梶山剛（国立都城工業高等専門学校教授）

本発表では、日露戦争（1904-1905年）後のポーツマス条約時に日本の全権を握っていた外務大臣で宮崎県日南市飢肥出身の小村寿太郎（1855-1911年）の外交政策に焦点を当てる。

1901年（明治34年）、小村は、46歳の時、桂太郎内閣の外務大臣に就任したが、当時の日本政府は、対露開戦へと世論の風潮が高まる中で、どのようにしてアジアからロシアの影響力を排除するのかということを中心に徹底的に議論していたが、結局、当時のロシアと対立していたイギリスと手を結ぶことを「最優先」と考え、1902年（明治35年）、日英同盟が小村の交渉により無事締結されることとなった。

一方、日露戦争勃発後、日本は戦局を有利に進めていったが、実際のところ、人員も資金も底をついていた。このため、日本政府内部ではロシアとの早期講和を求める声が増え、高まっていったが、国内の実情を隠しながら交渉し、戦勝国として有利な条件を引き出すためには、高度な外交手腕が必要だった。この難題に日本政府首脳たちの誰もが尻込みする中、小村寿太郎は、それに屈することなく再度立ち上がったのである。

しかし、一方のロシアも引かずにはいたので、交渉は暗礁に乗り上げるかと思われたが、小村の強硬な姿勢が、当時のアメリカ合衆国のセオドア・ローズベルト大統領の心を動かし、日本を有利な条約締結へと導いたのである。これにより、日本は欧米列強と肩を並べるだけの国際的権勢を得ることになった。

さらに、小村は、1911年（明治44年）、日米通商航海条約に調印し、これにより、日本は、関税自主権を完全に回復し、名実ともに列強の仲間入りを果たしたのであるが、小村は、1911年の調印後、ビール好きによる酒の飲みすぎが原因で持病が悪化し、外務大臣を辞職すると、56歳の若さで亡くなった。

こうしてみると、日本を思い、毅然とした態度と行動によって困難を乗り越えてきた小村寿太郎は、まさに明治時代の外交問題解決に一生を捧げた偉大な外務大臣だったと言える。加えて、太平洋戦争終結時のポツダム宣言受諾に携わった当時の外務大臣、重光葵と時代は違うものの、彼らの外交政策ばかりでなく、性格的な違いについても比較し、考察してみる。

【参考文献】

Chapman, John & Inaba Chiharu (eds.), (2007). *Rethinking the Russo-Japanese War, 1904-1905. Vol. II. The Nichinan Papers*, Global Oriental.

中島淳祐・長友禎治・藤本透. (2013). 『小村寿太郎若き日の肖像』 鉾脈社.

武田知己（監修）・松原勝也（編集）. (2023). 『大分県先哲叢書 重光葵資料集』 第一巻, 大分県先哲史料館.

研究発表

第2分科会 良心館4階 RY421

【後半】14:10~14:40 司会：伊藤豊（山形大学教授）

アメリカン・フローラル・アート形成におけるいけばなの位相 —戦前期の言説を中心に—

Małgorzata Dutka（大阪大学大学院研究生）

周知の通り、華道（いけばな）は、2024年に日本の無形文化財に登録された。その背景には、いけばな従事者の減少や生活スタイルの変化にともなう伝統文化継承の危機があると思われる。一方、いけばなに関する学術研究をみると、その歴史や思想史については豊富な蓄積があるものの、海外におけるいけばなの受容を解明する動きは数年前にはじまったばかりである。そのため、いけばなと欧米のフラワーアレンジメントとの歴史的な関係、あるいは、いけばなが世界の文化に及ぼした影響などはほとんど明らかにされていない。結果として、世界文化におけるいけばなの意義も十分に理解されていないといえる。

上記の状況を受けて、本報告では、外国向けのいけばな紹介がフラワーアレンジメントの理論や表象形成にどのようなインパクトを与え、いかなる影響を及ぼしたか検討していく。その際、分析対象となるのは、いけばなとフラワーアレンジメントの関係が最も鮮明に表れている戦前期の米国の展開である。

まずは、米国の大学における花卉園芸学部の創設にともなって提唱されたフラワーアレンジメント原理にみられるいけばな論や日本美術論の有り様を検討する。次に、アメリカのガーデンクラブ活動、特に、フラワーショーに関連している活動（講座や参考書の内容など）のなかで、いけばながどう位置付けられたか解明する。そして、そのような活動の背景にあった日本移民や古美術商、日本でいけばなを習ったイケバニストの役割にも着目して、いくつかの事例を紹介・検証する。

考察の結果、戦前期のアメリカン・フローラル・アート理論の形成や実践において、いけばな理論と実践方法の深い影響がみられるといえる。米国のフラワーアレンジメントは、欧州、特に、英国のそれに習い、花材をマッサ（塊）にまとめるのは基本であったが、いけばなの特徴であるライン（線）の構成が紹介されたことによって、新しいスタイルとしてラインアレンジメント、ライン・マッサアレンジメント、モダンアレンジメントが成立した。広義において、戦後普及した、いわゆる、ホガースライン様式の成立も、線的構成の発展形であるといえる。さらに、様々なスタイルのアレンジメントの評価基準には、いけばなの禁忌が受け継がれたことなども特筆すべきである。

また、本来、欧米のフラワーアレンジメントに見られなかった思想（例えば、植物の生育環境重視、実践者の精神に及ぼす影響など）の形成にも、いけばな理論の影響が窺われる。その背景には、いけばなの普及に努めた日本移民の活動があったことは注目に値する。

なお、戦前期にいけばなの影響のもとで形成されたアメリカン・フローラル・アートは、戦後さらに発展し、米国におけるいけばなブームの土台となった。そのプロセスの詳細については、今後明らかにしていきたい。

研究発表

第2分科会 良心館4階 RY421

【後半】14:40~15:10 司会：伊藤豊（山形大学教授）

一個性と一回性——思想史とインターネット時代、文学と芸術、対話文化の横断的研究

横道誠（京都府立大学准教授）

本発表は、「一個性」と「一回性」という両概念を軸として、その思想史的展開を整理しつつ、インターネット時代、文学・芸術および対話実践について、文化横断的に論じる。

第一に、一個性について、ケルケゴールがいう「単独者」としての主体が引き受ける実存的責任と他者との関係性から生じる政治的責任の緊張関係を論じる。フッサールの「生きられた体験」の概念、唯一の可能性としての死という観点からのハイデガーの存在論、サルトルの自由と責任、レヴィナスの「顔」による倫理的要請、さらに、アーレントが公共性論で論じた複数性の議論を参照し、一個性とは孤立した自己ではなく、他者との関係のなかでこそ立ち上がるものであることを示す。

第二に、一回性について、ニーチェの永劫回帰を出発点としつつ、それが宇宙物理学的には誤りだということを確認したうえで、資本主義的の反復との思想的親和性を検討する。プラーストの「マドレーヌ体験」、ホワイトヘッドのプロレス哲学、ベンヤミンのブランキ論とアウラ論を参照し、さらに、ウォーホルの芸術を参照項として、現代の芸術にアウラの消失とは異なる理解を施す。あわせて、ハイデガーの頹落と運命、ドゥルーズの差異・反復論、デリダの差延などを参考にしつつ、現代世界における一回性の意味を考える。

第三に、SNSと生成AIによって特徴づけられる現在のインターネット時代を分析する。SNSに投稿される文章、画像、映像、音声などによって「この瞬間の私」という一個性・一回性が強調される一方で、それらはスクリーンショット、ダウンロード、ミーム化、アルゴリズムによる最適化を通じて容易にコモディティ化・陳腐化され、一個性・一回性を危機に追いやっている。さらに、生成AIは、アマチュアにもプロ級の高度な表現を可能ならしめているが、そこには、一定のアウラが宿りつつも、真の一個性・一回性の欠如が逆説的にアウラ喪失の感覚を強め、ベンヤミンの洞察を改めて説得的なものにしている。

第四に、文学・芸術および対話実践を検討する。文学的・芸術的表現を選ぶとき、商業的文脈のなかでは、唯一無二の個性（一個性）が不可欠であり、同時に、美的鑑賞はつねに一時的な出来事と言える。さらに、オープンダイアログや当事者研究といった医療に関わる対話文化を参照し、バラバラな声がポリフォニーとして響きあう一個性と特別な対話的高揚が担う一回性の倫理的・実践的意義を明らかにする。最後に、対話的实践を文学的・芸術的に記録するものとしてのオートエスノグラフィーについても言及する。

研究発表

第2分科会 良心館4階 RY421

【後半】15:10~15:40 司会：伊藤豊（山形大学教授）

救済論的パラダイムと社会的レジリエンス —カンボジア大虐殺をめぐるベトナムとの比較から—

森下一成（東京未来大学教授）

本研究は、2025年のカンボジアにおける現地調査を起点とし、社会に内面化している「救済論的パラダイム」が、極限的な政治暴力に対する社会的レジリエンスに及ぼしたかを、教育と道徳の視座から明らかにする。平和とは、単なる静穏な状態ではなく、不当な力の行使に対して「否」を突きつける知的な抵抗力こそが真の安全装置であることを、カンボジアとその隣国ベトナムにおける宗教的背景の比較から探求したい。

カンボジアにおける精神的基盤である上座部仏教の「業 (kamma)」の論理は、現世の苦難を過去世の行為の結果とする徹底した自己責任の体系である。この論理構造は、ポル・ポト政権によるジェノサイドという不条理に直面した際、怒りのベクトルを内面へと反転させ、加害者を「運命の代理人」として相対化する認知的構えを生じさせた。また、解脱という「個の内的完成」を究極の目的とする救済の個人主義は、社会的不条理への世俗的介入を脆弱なものとした。さらに、伝統的規範である「チュバップ」が培ってきた沈黙や服従の美德は、皮肉にも政権が国民を思考停止した労働力として統制するためのインフラとして機能し、組織的な防衛反応を麻痺させる結果を招いた。対照的に、ベトナムの大乗仏教は、「菩薩道」を中心概念に据え、救済の舞台を世俗の社会そのものに設定している。他者の救済なくして自らの悟りはないとする「自利利他」の精神は、独裁政権や不当な権力に対する積極的な非暴力抵抗を「慈悲の実践」へと昇華させた。1960年代の焼身供養に見られるような命を賭した行動は、単なる政治デモではなく、不当な権威に対する精神的優位を宣言する能動的なレジリエンスの表出であった。このような大乗的パラダイムは、僧侶のみならず学生や労働者、さらには、軍内部の兵士の良心をも動かす強力な「社会的スクラム」を形成し、抗体として機能したように思われる。

本研究の比較考察が示唆するのは、宗教的伝統それ自体の優劣ではなく、社会に内面化された救済論的パラダイムが、不条理な暴力に直面した際に「受容」へ、あるいは、「介入」へと傾くかという構造的差異である。本研究は、この差異を、宗教思想史の問題としてではなく、教育を通じて身体化された道徳的実践体系の帰結として捉え直す点に独自性を有する。平和とは、単に暴力が不在である状態ではなく、不当な力の行使に対して「否」を表明し得る認知的・倫理的装置が社会に実装されている状態である。本発表は、東南アジア仏教圏の比較から得られた知見を基に、「抵抗の論理」をいかに教育的に涵養し得るかという課題を提示し、その理論的基盤を提供するものである。

【参考文献】

大坪加奈子. (2017) 「政教関係と寺院の社会活動—カンボジア南東部村落を事例として—」
『宗教と社会』 Vol.23, pp.63-78.

研究発表

第3分科会 良心館4階 RY422

【前半】12:30~13:00 司会：轟木靖子（香川大学教授）

中国人日本語学習者における条件文と文末モダリティの使用実態と誤用分析
—「と・ば・たら・なら」を中心に—

程天武（同志社大学大学院博士前期課程）

日本語の仮定条件文の習得は、学習者にとって難しい課題とされている。その理由として、日本語の条件表現が、文脈や用法に応じて異なる意味と機能を持つ点が挙げられる。このため、条件表現の助詞と文末のモダリティの組み合わせには、学習者による誤用が頻繁に観察され、日常会話においても、文末のモダリティの使用は観察されないことがある。

仮定表現そのものの用法に関する先行研究として、周（1983）や庵（2018）などが、「と・ば・たら・なら」の用法を分析している。また、仮定表現とモダリティの共起の研究として、益岡（1993）やソルヴァン・前田（2005）は、「ば」は動作動詞の場合において、文末モダリティが制約されることや「たら」はモダリティ制約が弱いことが指摘されている。しかし、先行研究では、条件文とモダリティの関係が全体的に解明されてなく、コーパスなどの大規模データを利用した学習者の使用実態に関する研究も十分ではない。このように、仮定条件文におけるモダリティ制約については、まだ研究の余地があると考えられる。

本発表では、まず、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、「と・ば・たら・なら」の文末に共起するモダリティ形式と使用実態を明らかにする。次に、日本語教科書を調査し、教科書で「と・ば・たら・なら」の内容に対する説明を明らかにする。最後に、日本語学習者の条件文における誤用のメカニズムを明確化し、誤用を防ぐ改善策を提案する。

本発表では、コーパス分析、比較分析、教科書調査を主な研究方法として用いる。研究結果として、まず、コーパス分析により、母語話者と学習者が仮定文を使用する際に共起するモダリティ形式は違いがあると明確される。次に、学習者による仮定条件文における具体的な誤用類型を特定し、原因が母語転移と教科書と関係があると論じる。最後に、先行研究で指摘されている条件表現とモダリティの共起制約がコーパス調査で再検証する。

本発表の学術的・社会的意義として、コーパス分析の視点から、先行研究の中で言及されていない言語事実を明らかにし、母語話者と学習者が「と・ば・たら・なら」を使用して作成する条件文の使用実態を指摘する点が挙げられる。また、現在使用されている教科書の内容を点検し、日本語教育現場へ改善策を提案することができる。

【参考文献】

- 庵功雄. (2018) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク出版.
- 周複卿. (1983) 「日本語の条件表現」『言語学論議』2, pp.28-47.
- ソルヴァン、前田直子. (2005) 「「と」「ば」「たら」「なら」再考」『日本語教育』125, pp.28-37.

研究発表

第3分科会 良心館4階 RY422

【前半】13:00~13:30 司会：轟木靖子（香川大学教授）

外国語初学者にも個人文体があるか？

—中国人日本語学習者らの作文を対象として—

柳燁佳（中国・紹興大学外国語学院専任教師）

「文は人なり」というビュフォンの至言にあるように、文章にはそれを書いた人間の人がよく表れていると信じられる。洋の東西を問わず、言葉の組み立て方について、様々な角度から著者の特徴を見出そうとしてできた計量文体学 (stylometry) という由緒深い学問すらある。しかし、それが扱う問題のほとんどは、ある言語の母語話者の文章に限定され、二種類以上の言語を使い分けられるマルチリンガルたちによる文章に関しては、研究がまだ少なく、かつ、その多くが仏・英・西・葡語などラテン文字を有する言語のうちのどれか2つができるバイリンガルにフォーカスした、言語を跨ぐ著者識別用文体特徴量の開発・改良か、より良質な機械翻訳に繋ぐ対訳コーパスの構築である。

日本語文章を対象とした計量文体学の場合も、これまで日本語の母語話者である日本人の文章に限定して研究が活発に行われてきたものの、外国人日本語学習者が日本語で書いた文章となると、管見の限りでは、それが対象の計量文体学がらみの研究はまだない。

本研究では、筆者が籍を置く中国のとある地方都市の国立大学の新一年生23名に、冬休み期間を除く2026年上半期の各月に書かせた日本語小論文4回分を研究対象として、外国人日本語初学者の文章にも、個々人を他者から区別できるような、特徴的な文章表現、個人文体めいたものが存在するかについて明らかにする。ちなみに、被験学生が皆、センター試験にあたる中国普通高等学校招生全国统一考試（高考）において、外国語科目として日本語を選び、大学入学時点で、2~3年の日本語学習歴を持っていた。

具体的に、宿題として与えた比較的簡単なテーマ (i.e. 大学生活、誕生日) について、手書き形式で書かせた100字以上の文書群を、書き損じに関する詳しい情報も含め、なるべく忠実に電子化して、そこからひらがな・カタカナ・漢字など異なる構成要素が占める割合や文字・形態素・品詞の bigram といった一般的に著者識別用特徴量を抽出した。また、日本語の初学者という被験学生の特異性に鑑みて、各人がミスした箇所 (i.e. 誤字脱字、誤用) を整理してできた「誤謬パターン」を新たに導入した。これらのデータに対して、ウェルチの t 検定、主成分分析のほか、代表的な分類器であるランダムフォレストをも駆使して、同じ学生を著者に持つ文章同士が、そうでない文章に比べて、より高い類似性を示しているかについて検証する。

【参考文献】

Barlas, G., & Stamatatos, E. (2020). Cross-domain authorship attribution using pre-trained language models. In *IFIP International Conference on Artificial Intelligence Applications and Innovations*, 255–266.

研究発表

第3分科会 良心館4階 RY422

【前半】13:30~14:00 司会：轟木靖子（香川大学教授）

翻訳授業におけるディスカッション活動の導入とその効果に関する考察

江秀姿（台湾・銘伝大学准教授）

グループ・ディスカッションを用いた教授活動は、共通のテーマに対する学生の思考および意見交換を促し、相互のブレインストーミングを通じて、問題の発見・解決を図るものである。また、この手法は、従来の授業モデルに活気をもたらし、学習効果を高める一助ともなる。外国語の五技能（聴解・口頭表現・読解・作文・翻訳）の習得過程において、会話や読解の授業では、ディスカッション活動が頻繁に使われる一方で、翻訳の授業における実践例は、比較的少ない。

そこで、本研究では、翻訳の授業でディスカッション活動を導入する試みを行った。具体的には、教室活動として、学生に日本語の例文を中国語へ翻訳させ、多様な訳出方法について議論を行うことで、訳文の長所・短所や誤訳、気づいた点などを整理させた。その後、各グループによる成果発表を実施した。

実践の最後にはアンケート調査を行い、ディスカッション活動に対する学生の受容度、学習効果、および問題点を検証した。その結果、八割を超える学生が、授業内でのグループ・ディスカッションを肯定的に評価していることが明らかとなった。言語面の学習効果において、「考えつかなかったことが学べた」、「より多くの語彙や表現方法が学べた」、「より質の高い訳文を訳出できた」との認識が示された。また、学習姿勢においても、教師の説明を待つ受動的な態度から、「グループ・ディスカッションで積極的に仲間に意見を伝えたり、仲間の意見を聞いたりした」という能動的な態度に変わった。そして、学習者の互いの意見交換の作業においても、原文の内容理解がさらに促進され、訳文に対する「気づき」能力も強化できたとと言える。

研究発表

第3分科会 良心館4階 RY422

【後半】14:10~14:40 司会：柳燁佳（中国・紹興大学外国語学院専任教師）

DX教育における生成AI利活用意識の二軸分析 —日台比較と偏差値層別比較による意識構造—

林琦翔（台湾・淡江大学学士課程・京都橘大学留学生）

北林利治（京都橘大学教授）

本研究は、DX教育における生成AIの位置づけを検討するため、大学生の生成AI利活用意識を把握し、日本・台湾間および学力水準（偏差値層）による差異を明らかにすることを目的とするものである。

台湾の321名、日本の102名を対象に、AI支援の必要性、使用容易性、学習への影響（負担感・楽しさ）、就業有用性、評価観、将来不安など計9項目を、5件法（リッカート尺度）で測定した。調査結果によると、Q9「AIの発展に伴い、将来について不安を感じることはありませんか」において、日台間の差が最も大きく、日本の平均は3.48、台湾の平均は2.44であり、日本の学生の方が不安を強く抱いている傾向にあることが判明した。この結果からは、日本の学生が、生成AIの有用性を認めつつも、学習評価のあり方や能力形成の見通し、社会変化の速度に対するリスク認知が相対的に高い可能性が示唆されている。また、偏差値層別比較に目を向けると、Q4「今後AIを使用しないと、ほかの人に遅れを取り、競争力を持たなくなると思いませんか」に明確な差が見られ、偏差値上位層の平均は4.29であるのに対して、非上位層は3.19であった。上位層ほど、生成AIを学習上の補助に留まらず、将来の学習成果やキャリア形成に関わる重要な資源として位置づけていることが窺える。他方で、非上位層では、必要性の理解があっても、切迫感が相対的に弱い可能性があり、利活用の定着には、授業内での導入方法が影響すると考えられる。

以上の結果を踏まえると、DX教育における生成AI導入は、一律の施策ではなく、意識差を前提とした段階的設計が不可欠である。活用意欲が高い層には、情報の検証や学習成果の自己点検といった高度なリテラシーを中核に据え、学習の質を高めるガイドラインの整備が重要となる。一方、不安が強い層や活用が定着しにくい層には、課題難度の調整、モデル提示、フィードバックの明確化などの学習環境を整え、成功体験を積み上げる支援が求められる。なお、本研究は、二軸分析に基づき、生成AIをDX教育へ実装する際の学習支援の設計に関する方向性を示唆する基礎資料として、今後の実証研究および教育実践の改善を今後の課題としたい。

【参考文献】

- 落合由治. (2020) 「AI技術からみた日本語学、日本語教育研究の展望と課題—日本語教育の繋がりと協働の新領域をめざして」『日本語教育研究』第50輯, pp.23-24.
- 曾秋桂. (2025) 「AI時代下の「不易流行」に相応しいクリエイティブな日本語授業を目指して」『2025年度輔仁大学日本語学科国際シンポジウム文化における「不易流行」論文集』 pp.119-128.

研究発表

第3分科会 良心館4階 RY422

【後半】14:40~15:10 司会：柳燁佳（中国・紹興大学外国語学院専任教師）

村上春樹『女のいない男たち』における人間関係

葉菱（台湾・淡江大学教授）

村上春樹は、2011年6月9日に行われた「カタルーニャ国際賞」の受賞式において、「非現実的な夢想家として」と題したスピーチを行った。3ヶ月前に発生した東日本大震災に触れ、「損なわれた倫理や規範の再生」において、作家が果たすべき役割は、「新しい倫理や規範」と「新しい言葉」を連結し、人々を励ます「生き生きとした新しい物語」を創出することだと述べている。

一方、渡辺（2017）は、震災後社会の再構築について、他者との交流を通じて獲得される「新しい関係性」は、生活再建に必要だと論じている。この見解は、村上春樹が「非現実的な夢想家として」での発言と呼応するものであり、「生き生きとした新しい物語」を形成する基盤が、「新しい倫理や規範」を生み出す「新しい関係性」にあることを示唆している。

震災後に刊行された最初の作品『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（2013年）は、「表面的には、明確な影響関係は見いだせない」（平野, 2014）と指摘される一方、「協力者としての沙羅」との「パートナーシップ」に構成された「生き生きとした新しい物語」（葉 2025）として捉えることができる。

本稿では、その続編的考察として、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』と同様に、東日本大震災についての言及が見られない『女のいない男たち』（2014年）を研究対象とする。人間関係のあり方に注目し、「生き生きとした新しい物語」を成立させる「新しい関係性」が、いかに表象されているかを明らかにする。

【参考文献】

- 平野芳信. (2014). 「『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論—鏡の国のたさき創—」『山口国文』(37), 1-12.
- 葉菱. (2025). 「村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論—未来をひらくパートナーシップ—」『台湾日本語文学報』(58), 91-118.
- 渡邊千恵子. (2017). 「東日本大震災が家族にもたらしたこと」『家族関係学』(36), 5-10.
- 文学教育研究者集団. 「非現実的な夢想家として—村上春樹 カタルーニャ国際賞スピーチ原稿（全文）」https://bunkyoken.org/82sakkacorner/murakami_Catalunyaspeech.html（参照 2026年1月10日）

研究発表

第3分科会 良心館4階 RY422

【後半】15:10~15:40 司会：柳燁佳（中国・紹興大学外国語学院専任教師）

村上春樹文学の生死美学 —1990年代の創作群から見て—

曾秋桂（台湾・淡江大学教授）

内藤理恵子は、村上春樹の短編小説を「死の文学」¹としており、また、夏目漱石の『こころ』と対照しながら、村上春樹文学が「グズグズした生」を肯定する論説も出している。一方、平野純が処女作『風の歌を聴け』（1979）に出た「我々には生もなければ死もない。風だ」²の記述を根拠に、村上春樹を「現代日本を代表する仏教作家」³としている。

確かに、村上春樹のデビュー作から15作目となる長篇小説『街とその不確かな壁』（2023）に至って、死生描写が多くされており、死生問題が作品中に脈々と底流している。死生問題を抜きにしては、村上春樹文学を語ることが出来ないほど大きな課題に向けて、既に4段階に分けて、1980年代の最後で、6作目となる長篇小説『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）までの創作群を考察した。考察・分析した結果に限って言えば、死生描写を4パターンに類型することが出来た⁴。その4類型からは、村上春樹文学には死が多くある中、なお不完全ながら「生」を求める生死美学が窺われる。要するに、「死の文学」と言われるが、「グズグズした生」を肯定する村上春樹文学の表象なのである。

今回は、1990年代の7作目の『国境の南、太陽の西』（1992）、8作目『ねじまき鳥クロニクル』（1994-1995）、9作目『スプートニクの恋人』（1999）までの創作群を取り扱い、今まで考察した結果と対照・比較しながら、1990年代まで村上春樹文学の生死美学を導き出すことにする。

このように、村上春樹文学研究においては、避けては通れない死生観を体系化する課題に向けて、その生死美学を明らかにするつもりでいる。

【参考文献】

平野純. (2016) 『村上春樹と仏教』 楽工社, p. 11 と p. 39.

内藤理恵子. (2019) 「死の文学」としての村上春樹の短編小説—「眠り」「偶然の旅人」「中国行きのスロウ・ボート」他」

https://note.com/njg_note/n/n9a19fa237b2a (2026年1月4日閲覧)

¹ 内藤理恵子. (2019) 「死の文学」としての村上春樹の短編小説 —「眠り」「偶然の旅人」「中国行きのスロウ・ボート」他」 日本実業出版社 https://note.com/njg_note/n/n9a19fa237b2a(2024年10月1日閲覧)

² 平野純. (2016) 『村上春樹と仏教』 楽工社, p. 39 では、「風」が仏教では伝統的に「無常なるもの」を象徴する言葉であったことは、『平家物語』を学校の教科書で読んできた日本の読者にはいまさら断るまでもない話でしょう」とある。

³ 平野純. (2016) 『村上春樹と仏教』 楽工社, p. 11.

⁴ 曾秋桂. (2025) 「死の文学」と言われた村上春樹の1980年代までの創作群に築いた死生観—『ダンス・ダンス・ダンス』とその前の短篇集を中心に— 『2025年度台湾日本語文学シンポジウム予稿集』 pp. 19-26, 台湾日本語文学会.

研究発表

第4分科会 良心館4階 RY423

【前半】12:30~13:00 司会：金塚基（東京未来大学准教授）

アメリカ大統領10名のインタビューにおける天候と時間を表す *it* の指示性と談話的役割

山本茉莉（びわこ学院大学非常勤講師）

本発表は、天候・時間・距離・状況など（以下、状況（環境））を表す文の主語位置に現れる特別用法とされている *it* に着目する。従来、状況（環境）の *it* は、指示対象を持たない形式主語として捉えられている。一方、天候を表す *it*（以下、天候の *it*）と時間を表す *it*（以下、時間の *it*）には、異なる機能的特性があることが指摘されている。例えば、天候の *it* には、動作主的特性が認められるとの指摘があり（中右, 1994）、一方、時間の *it* は、談話の区切りを形成する機能を担うことが報告されている（山本・山内, 2023）。これらの先行研究は、状況（環境）の *it* における指示性と談話的役割が一樣ではないことを示唆している。そこで、本発表は、状況（環境）の *it* は、提示される状況の種類に応じて、異なる指示対象を持つとする立場を採り、状況（環境）の *it* の特性の精緻な記述を目指す。具体的には、天候の *it* と時間の *it* を取り上げ、指示対象および談話的役割を比較し、状況（環境）の性質に応じた精緻な記述を目指す。

本調査は、アメリカ歴代大統領の即時的な公的発話を資料にして、状況（環境）の *it* の役割を明らかにすることを目的とする。そこで、1969年から2025年までの56年間にわたるアメリカ大統領10名（Richard Nixon, Gerald R. Ford, Jimmy Carter, Ronald Reagan, George Bush, William J. Clinton, George W. Bush, Barack Obama, Donald J. Trump（第1期）, Joseph R. Biden, Jr.）のインタビューデータの独自のコーパスを用い、話題の感情極性などを含む特徴と状況（環境）の *it* の特性の関連性を定量的および定性的に検証する。

調査の結果、天候については、多くの大統領で使用頻度が低い一方、Richard Nixon は、天候の *it* を顕著に用いることが判明する。この結果は、天候が話題化されにくい一方、特定の談話戦略として、天候の *it* が用いられる可能性を示す。一方、時間については、多様な文構造で提示され、カイ二乗検定の結果、各大統領が用いる文構造に有意差が確認できる（ $X^2 = 120.09$, $df = 54$, $p < 0.001$ ）。特に、時間の *it* は、George W. Bush によって顕著に使用されており、これらの使用頻度の差は、各大統領の発話特性のみならず、各大統領が置かれた時代的背景やその時期に話題化される国家的状況との関連を考慮する必要があることを示している。以上の結果は、状況（環境）の *it* は、使用される文脈や談話戦略に応じて異なる機能を果たしており、その指示性と談話的役割が一樣ではないことを示唆していると主張する。

【参考文献】

中右実. (1994). 『認知意味論の原理』東京：大修館書店。

山本茉莉・山内信幸. (2023). 「いわゆる『*it* の特別用法』をめぐる再考察—4つの状況カテゴリーに着目して—」『比較文化研究』151, 39-49.

研究発表

第4分科会 良心館4階 RY423

【前半】13:00~13:30 司会：金塚基（東京未来大学准教授）

新聞『盛京時報』の児童副刊における児童像から見るプロパガンダ

符旂恩（広島大学大学院博士後期課程）

本発表は、1906年に中島真雄によって奉天で創刊された漢字新聞『盛京時報』の児童副刊を対象とし、そこに描かれた児童像が、植民地的文脈の中でいかに政治的意図を含んだプロパガンダとして機能していたのかを検討するものである。

新聞の児童副刊というメディアは、「満洲」における児童向けの文学的空間の萌芽をなす重要な場であった。その中、『盛京時報』の児童副刊は、同時期の『泰東日報』や『満洲報』といった主要新聞紙の副刊と比較しても、存続期間は際立って長く、「満洲」における児童メディアを考察する上では看過できない対象と言える。「満洲国」の新たな支配者による政治色が強まる一方で、1920年代以来の文化的基礎を受け継いでおり、政治的要請と文化的土壌の狭間に、言説の余地が残されたと考えられる。

そこで、本発表では、理論的枠組みとして、Hall (1992)の「エンコーディング/デコーディング」の概念を援用する。メッセージの生産と消費のプロセスには権力関係や社会的背景が複雑に関与することに注目しつつ、『盛京時報』児童副刊における児童というイメージの特徴を考察し、そこに反映されたプロパガンダの様相を明らかにする。

具体的には、1937年以前の紙面に掲載された〈児童〉に関する写真、イラスト、記述といった表象に注目し、それらがどのような文化的価値を読者に提示し、内面化させたのかを考察する。ここでは、「児童像」を単なる日本人指導層の理念や要求に基づく一方的なプロパガンダの投影としてではなく、編集者や投稿者といった紙面形成と直接関与している表現者による再解釈、および読者による多様な読み解きという動的なプロセスとして捉え直す。

これにより、戦時下の言論統制におけるプロパガンダが、いかなる意味の変容や相克を経て立体的に構築されていたのかを浮き彫りにし、「満洲」の児童メディア史におけるプロパガンダと児童向けの新聞副刊の関係の新たな一面を解明することを目指す。

【参考文献】

- 魏晨. (2023). 『「満洲」をめぐる児童文学と綴方活動：文化に潜む多元性、辺境性、連続性』 ミネルヴァ書房.
- Hall, Stuart. (1992). Encoding/decoding, culture, media, language: Working papers in cultural studies, 1972-79. New York: Routledge, 128-138.
- 徐璐. (2024). 「『盛京時報』とその影響力の射程—満洲における日系漢字新聞の発行規模・販路・読者層について—」 『東洋学報』 106(3), 1-31.
- 中下正治. (1996). 『新聞にみる日中関係史：中国の日本人経営紙』 研文出版.

研究発表

第4分科会 良心館4階 RY423

【前半】13:30~14:00 司会：金塚基（東京未来大学准教授）

今日の途上国が経験する成長の壁—先進国と途上国の比較

佐久間浩司（京都橘大学教授）

2010年代初頭、発展途上国の中間層は、「ボリューム・ゾーン」と呼ばれ世界経済の牽引車として注目された。コンサルティング会社、金融機関、国際機関など多くの関係者が、途上国中心に成長する未来を予想し、ビジネス界は、自動車からファッションまで如何にこの所得層のニーズをつかみ、購買意欲をかきたてる商品やサービスを提供するかに躍起になった。2020年代に入り、その途上国ボリューム・ゾーンの様子がおかしい。当初の想定と比べると、それほど成長を示してないのである。本研究は、こうした途上国経済の低迷に焦点を当て、特に、GDPの半分以上を占める消費の主体となる家計、中でも、人口の上で大きな塊である中間層の家計の不振を分析したものである。

近年、企業の生産や輸出においては、途上国からもグローバルに通用するブランドの企業が生まれ先進国に引けを取らないパフォーマンスを見せた。一方、家計の消費は停滞している。その背景として指摘されるのは、グローバル経済の成長をもたらしたとされる、技術進歩、グローバル化、市場志向の改革という3要素が持つ負の側面である。これらは、経済全体の生産性向上に大きく貢献する一方で、労働者間の所得格差をもたらした。革新技術を使いこなして一層の所得拡大の機会を得る職業がある一方で、機械やAIに取って代わられる職業があった。グローバル化が進める国際分業は、地の利を得て成長する地域を生み出す一方で、競争力を失い、衰退する地域も生み出した。市場志向の改革は、国際競争の勝者をいかに作り出すかという改革であり、敗者をどう救うかという政策は後回しになりがちだった。

先進国と途上国の歴史を比較すれば、先進国は、経済発展の初期段階でこうした競争を是とする経済システムをベースとしつつも、その欠点を補完する包摂的な経済制度作りで成功した。しかし、今そうした初期段階を迎える途上国に、その余裕はない。激しい国際競争、短くなったビジネスサイクル、あらゆる産業に広がる省力化に直面し、そのような包摂的的制度作りの機会を逸している。その影響が、途上国の消費の伸び悩みとして顕れているのが今日の世界経済である。途上国の人口は大きく、その悪影響は世界全体に及ぶ。先進国にとっても、他国の問題ではないのである。解決には、グローバルな政策協調が不可欠である。

【参考文献】

ADB. 2019. *Income inequality in Asia*.

<https://www.adb.org/adbi/research/income-inequality-asia>

World Bank Group. 2013. *MIC Forum: The rise of the middle class*.

<https://www.worldbank.org/content/dam/Worldbank/document/MIC-Forum-Rise-of-the-Middle-Class-SM13.pdf>

研究発表

第4分科会 良心館4階 RY423

【後半】14:10~14:40 司会：三浦秀松（武庫川女子大学教授）

1930年代日台先住民エリート層における自民族認識とエスニシティの構築
—「第一回全道アイヌ青年大会」と「高砂族青年団幹部懇談会」を通して—

陳由璋（台湾・国立中興大学人文社会科学前瞻研究センター博士ポスト研究員）

明治2（1869）年、明治政府は蝦夷地を北海道と改称し、明治4（1871）年には、戸籍法を公布して、アイヌ民族を「旧土人」として編入した。一方、日清戦争後の台湾は、日本の植民地となり、先住民族は、「生蕃」、「熟蕃」として台湾総督府の管理下に置かれた。簡易教育と民族分離を理念とする政策のもと、アイヌ民族には「旧土人学校」が設置され、「生蕃」とされた台湾先住民族には「教育所」や「蕃人公学校」への就学が求められた。これらの学校教育を受けた人々の中からは、日本語に堪能で、政治・医療・教育などで頭角を現すエリート層が現れた。

同化政策や国体思想の影響を受けつつも、両地域の先住民エリートは、自民族の置かれた状況を踏まえ、結社運動や文筆活動を通じて独自の思想を形成した。1930年代の北海道と台湾では、先住民有識者による初の広域的会議が開催され、散発的な個人発信から組織的な意見交換へと展開した。本稿は、アイヌ民族の「第一回全道アイヌ青年大会」と台湾先住民族の「高砂族青年団幹部懇談会」を対象に、当時の先住民エリートがいかに関与し自民族認識とエスニシティを構築したのかを比較し、その異同を明らかにする。

【参考文献】

宇野英種. (1922). 「大正十年の理蕃成績を顧みて」『台湾警察協会雑誌』(57), 57-64.

小川正人・山田伸一編. (1998). 『アイヌ民族近代の記録』草風館.

河野本道編. (2004). 『アイヌ史新聞年表—小樽新聞（昭和期Ⅱ）編一』國學院短期大学コミュニティカレッジセンター.

シドル、リチャード. (2021). 『アイヌ通史：「蝦夷」から先住民族へ』岩波書店.

須田茂. (2018). 『近現代アイヌ文学史論—アイヌ民族による日本語文学の軌跡—〈近代編〉』寿郎社.

張耀宗. (2009). 「「蕃秀才」與部落發展」『教育研究集刊』55(4), 1-28.

宮島利光. (1996). 『アイヌ民族と日本の歴史：先住民族の苦難・抵抗・復権』三一書房.

理蕃の友. (1935). 「理蕃史上光輝ある一頁を飾る高砂族青年団幹部懇談會」『理蕃の友』第四年十一月号, 2-8.

理蕃の友. (1935). 「青年団幹部懇談會に出席して」『理蕃の友』第四年十二月号, 8-9.

理蕃の友. (1936). 「懇談會出席者の感想」『理蕃の友』第五年二月号, 8-11.

理蕃の友. (1936). 「全島高砂族青年団幹部懇談會感想」『理蕃の友』第五年三月号, 5-7.

研究発表

第4分科会 良心館4階 RY423

【後半】14:40~15:10 司会：三浦秀松（武庫川女子大学教授）

文化表象装置としての対戦格闘ゲーム —『ストリートファイターII』と戦士像の生産・再編—

長谷川千春（至学館大学助教）

本発表では、1980~90年代の対戦格闘ゲームの中でも、特に、『ストリートファイターII』（カプコン、1991年、以下『ストII』）を中心に、同作が単なる娯楽作品にとどまらず、筐体という物理的基盤を通じて、文化表象を生成・流通させる装置として機能してきた点を明らかにする。『ストII』は、互いに面識のない他者と直接対峙し競い合う遊戯体験を大衆化させ、「知らぬ者同士が戦う」という文化的実践を日常空間に定着させた。

この影響は、ゲーム空間にとどまらず、アニメーションや実写映画など多様なメディアへ拡張されている。たとえば、杉井ギサブロー監督によるアニメ映画『ストリートファイターII MOVIE』（1994年）は原作の物語性を強調し、キャラクターへの感情移入を促進した。一方、スティーヴン・デ・スーザ監督『ストリートファイター』（1994年）をはじめとする海外制作の実写映画では、日本発の対戦格闘ゲームが異文化的視点から再解釈され、グローバル市場向けの表象へと翻案されている。こうしたメディアミックス展開は、対戦格闘ゲームを起点として文化的意味が継続的に再構築されてきた過程を示す。

本発表が目指すのは、「格闘」という行為の表象が文化圏を越えて共有され、受容層の拡張とともに、戦士像を生成・再編していく点である。企業によって設計されたゲームおよびキャラクターは商業的商品である一方、プレイヤーの実践と受容を通じて意味づけが更新され、物語化や映像化を介して新たな文化的価値を生み出していく。

さらに、近年、対戦格闘ゲームは、eスポーツとして制度化され、国際大会の公式競技にも採用されている。競技者は、観客から支持される存在となり、試合前後の握手や相互承認といった儀礼化された振る舞いが重視される。こうしたフェアプレイ規範と英雄化の過程は、中世騎士道や武士道が、戦闘倫理からスポーツマンシップへと再編された歴史的過程と構造的に比較可能である。すなわち、戦闘技術と倫理が競技形式へ翻訳され、観戦文化と結びつくことで、競技者の社会的位置づけが確立される構造がここでも確認できる。

以上を踏まえ、本発表では、『ストII』を起点とする対戦格闘ゲームの展開を、視覚資料を用いて比較文化的視点から分析し、戦士表象と戦闘倫理が、デジタル環境において、いかに再編・制度化されているかを考察する。

研究発表

第4分科会 良心館4階 RY423

【後半】15:10~15:40 司会：三浦秀松（武庫川女子大学教授）

第一次世界大戦前後におけるドイツ語圏の決闘文化について

菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

近代的な意味における決闘文化の拠点であるフランスでは、16世紀末に、アンリ4世が決闘を禁止した後も、17世紀には、ルイ13世時代に宰相リシュリューが決闘禁止令を発令し、ルイ14世も決闘を厳罰化したが、この「名誉をかけて実行すべき」慣習は、その後も生き延びていった。

1819年以降、決闘が公的には禁止されていたイギリスでは、その後も軍隊を中心にこの慣習は維持され続けたが、1844年、将校間における「決闘の強要」に反対したヴィクトリア女王の統治下で、決闘に関する軍法（軍事刑法）が改正され、決闘を行った軍人は、軍法廷に召喚されることになった。この措置は、イギリスの軍隊における決闘の終焉を意味し、市民たちの考え方にも大きな影響を及ぼした結果、19世紀中頃に、決闘は衰退していった。

それに対して、ドイツでは、かつては貴族が独占権を有し、やがて、将校の必要不可欠な義務として、プロイセンを中心に寧ろ奨励され、制度化された決闘の慣習は、予備将校制度の導入により、19世紀には、一般市民にも浸透し、19世紀後半においても、教養市民層を中心に依然として隆盛を極めた。

しかしながら、20世紀のドイツ帝国末期になると、ドイツ社会を席卷していた「名誉をめぐる」決闘文化は、軍隊のみならず、市民階級においても、衰退の一途を辿っていき、その後、二度と復活することはなかった。

18世紀の終り頃、決闘の是非をめぐって、啓蒙主義的論争が既に交わされていたが、それ以降も、決闘擁護者と決闘反対者の両者が存在し続けた。19世紀中頃には、アルトゥール・ショーペンハウアーのような決闘に批判的な人物たちが、古来から受け継がれてきた病氣・悪行として決闘を糾弾した。そして、19世紀末から20世紀にかけて、決闘を非道徳的・非合法的・非合理的・反近代的なものとして、断罪する批判的意見がその激しさを増していくことになる。

そして、1900年頃、ヨーロッパの至る所で決闘反対派の団体・協会が形成された。そのメンバーの大部分は、貴族、高位の政治家で構成され、1902年、彼らを中心にドイツで反決闘連盟が結成された。

本発表では、これらのことを念頭に置きながら、その後の第一次世界大戦前後におけるドイツ語圏の決闘文化の実態とその衰退の理由を可能な限り明らかにする。

【参考文献】

Burkhart, Dagmar. (2006) *Eine Geschichte der Ehre*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Frevert, Ute. (1991) *Ehrenmänner. Das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft*. München: C.H. Beck.

Speitkamp, Winfried. (2010) *Ohrfeige, Duell und Ehrenmord*. Stuttgart: Reclam.

研究発表

第5分科会 良心館4階 RY424

【前半】12:30~13:00 司会：大谷鉄平（北陸大学准教授）

AI生成映像を用いたマルチモーダル教材によるオノマトペ習得の促進効果

譚梓怡（同志社大学大学院博士前期課程）

本発表は、中国人日本語学習者を対象に、AI生成映像を用いたマルチモーダル教材が、オノマトペの語用論的理解に与える影響を実証的に検討するものである。

オノマトペは、音象徴性を持つ語類であり、聴覚的・視覚的印象と強く結びつきながら、話者の感情や態度、使用場面といった社会的・語用論的文脈を反映する特徴を有する（田守, 2002）。そのため、適切な理解と運用には、単なる語義知識だけでなく、文脈情報を統合的に処理する能力が求められる。

しかし、小野（2007）の指摘を踏まえて、中国のN1教科書を調査した結果、オノマトペの使用頻度は、全体語彙数の5%未満にとどまり、文脈に即した用法や多義性に関する説明は十分とは言えないことが明らかとなる。さらに、オノマトペは、漢字を伴わない語彙体系であるため、中国語との語形類似や意味的連想に基づく正の転移が成立しにくく、中国人日本語学習者にとって、記憶定着および文脈判断が困難な語彙であると考えられる。

先行研究では、アニメーション視聴や映像提示がオノマトペの理解や産出を促進する可能性が示されている一方で、教材刺激の統一性や再現性の確保、提示条件の統制といった方法論的課題が指摘されている。そこで、本発表では、Mayer（2001）の「マルチメディア学習理論」に基づき、AI生成映像を用いて、視覚・聴覚情報を統制したマルチモーダル教材を作成し、その教育効果を検証する。

研究課題は、AI生成映像によるマルチモーダル提示が、文字教材に比べて、オノマトペの語用論的理解を有意に促進するかどうかである。

調査対象は、中国の大学に在籍する日本語学習者（N2相当以上）24名とし、被験者内計画を採用する。擬音語・擬態語計10語を対象とし、各語について、AI生成映像教材条件と文字教材条件を設定する。学習後には、文脈選択式テストを実施し、正答率を指標として対応のあるt検定による分析を行う。

本発表では、AI生成映像を用いたマルチモーダル教材が、文脈依存性の高い語彙であるオノマトペの習得を促進する可能性を示すとともに、外国語教育におけるAI技術を活用した教材設計の有効性について考察する。

【参考文献】

Dingemanse, M. (2012). "Advances in the cross-linguistic study of ideophones," *Language and Linguistics Compass*, 6(10), 654-672.

Mayer, R. E. (2001). *Multimedia Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

小野正弘. (2007). 『日本語オノマトペ辞典』東京：小学館.

田守育啓. (2002). 『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』東京：岩波書店.

研究発表

第5分科会 良心館4階 RY424

【前半】13:00~13:30 司会：大谷鉄平（北陸大学准教授）

Cultural Proximity and the Translation of Culturally Presupposed Statements
in *Tsurezuregusa*

ヴァシレブ・トドル（神戸大学大学院博士課程）

This study examines whether cultural proximity between source and target cultures influences the degree of explicitation in the translation of culturally presupposed statements. The analysis focuses on two passages from *Tsurezuregusa* (徒然草): Section 54, which states that a person who eats only chestnuts and never rice is unsuitable for marriage due to their peculiarity, and Section 32, which asserts that a house that is too complete or well-built is not a good place to live. Both passages present flat, evaluative assertions without explanation and rely on shared cultural background knowledge for their interpretation.

Such unargued statements pose particular challenges in cross-cultural contexts, as the assumptions that render them intelligible are not linguistically encoded in the source text. This study compares translations of the selected passages into six languages - English, Bulgarian, Russian, German, Chinese, and Korean, focusing on observable translation strategies such as explicitation, epistemic distancing, and interpretive supplementation. Drawing on research in cultural presupposition and translation universals (Blum-Kulka 1986; Nida 1964; Toury 1995), the paper aims to clarify how shared cultural background conditions the perceived need to guide interpretation in translation, without evaluating translation quality or correctness.

【参考文献】

- Blum-Kulka, S. (1986). Shifts of cohesion and coherence in translation. In J. House & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlingual and Intercultural Communication*. Tübingen: Narrm. pp.17-35.
- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating*. Leiden: Brill.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam: John Benjamins.

研究発表

第5分科会 良心館4階 RY424

【前半】13:30~14:00 司会：大谷鉄平（北陸大学准教授）

グローバル社会における英語教育と異文化理解

山崎祐一（長崎県立大学名誉教授・長崎国際大学特任教授）

子どもたちに外国語を学ばせる大きな目的の1つは、異文化圏の人々と円滑にコミュニケーションを実現するための能力を向上させることである。特に、英語は、グローバル化した社会において、国内外を問わず、国際語として圧倒的に強い通用力を持つ言語であるし、たとえコミュニケーションの相手が英語圏の人でなくても、共通媒体が英語になる可能性は非常に高いと言える。「ことば」はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たし、頭の中にあるイメージを相手に伝える重要な道具として機能する。世界の人々とやりとりをするために、ことばとしての英語を習得することは、子どもたちにとってはとても有益である。しかし、子どもたちが英語を使って何ができるようになるのかということと考えたとき、もしそれが異文化圏の人々とのインタラクションを通して、適切かつ効果的にコミュニケーションを実現するための能力の基礎を培うことであるならば、ことばとともに、その背後に見え隠れする社会文化的要素にも目を向けていく必要がある。子どもたちが外国の人々とお互いに意思疎通を図り、その独特のコンテキストの中で、自分とは違う世界や考え方を知り、それらを柔軟に認めながら、適切に目的を達成できるかどうかというところに、外国語学習の本当の楽しさがある。

子どもたちは、語句や表現を覚えて言えるようになっただけでは、そのことばを使う国のことを理解したことにはならないし、その国の人々と円滑にコミュニケーションがとれるようになるとは限らない。例えば、日本語を学ぶ海外の学習者たちが、日本人の心を寛容に認め、理解することなしに、日本人とうまくコミュニケーションがとれるとは考えにくい。日本語を流暢に話す日本人同士でも、「この人とは話がかみ合わない」ということがあるのは、お互いに相手の考え方が理解できないから、あるいは認めることができない、または、認めようともしていないからではないだろうか。異質な他者への寛容性があってはじめて、人と人との居心地のいいコミュニケーションは成立する。

本発表では、このグローバル社会における外国語教育に異文化理解の要素を取り入れることがなぜ有用なのか、外国語教育の中で異文化理解を学ぶことが子どもたちの将来にどうつながるのか、また、実際に異文化理解の内容を授業の中でどのように伝えることができるのかについて発表する。

【参考文献】

- ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages) . (2006). *World-Readiness Standards for Learning Languages*.
- Brown, H. D. (2007). *Principles of Language Learning and Teaching*. Harlow: Pearson Education, Inc.
- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Celce-Murcia, M., Dornyei, Z., Thurrell, S. (1995). Communicative Competence: A Pedagogically Motivated Model with Content Specifications. *Applied Linguistics*, 6(2), 5-35.
- Charlebois, J. (2016). The Acquisition of Interlanguage Pragmatics and Communicative Competence, *Journal of Intercultural Communication*. No.19, 113-128.
- Coyle, D., Hood, P., Marsh, D. (2010). *Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

研究発表

第5分科会 良心館4階 RY424

【後半】14:10~14:40 司会：山崎祐一（長崎県立大学名誉教授・長崎国際大学特任教授）

配達物受け渡し場面における授受表現と語用論の検討 —アイトラッキングと作文データによる日本人学生の視点取得の分析—

佐古恵里香（同志社大学助教）

本発表は、配達物の受け渡し場面における視線行動と授受表現の言語化過程の関係について、視点取得の観点から検討することを目的とする。視点取得とは、他者の立場や位置から何が見え、どのように考え、感じるかを推測する認知的能力である。本発表では、研究課題Ⅰとして、視線による注意配分が作文にどのような影響を与えるのか、研究課題Ⅱとして、矢印等による注意喚起によって、想定視点がプライミングされ、述部の時制・相選択が誘導されるのかを検討する。視覚刺激として、「郵便物の受け渡し場面」を用い、立場指定の異なる3条件（①立場未指定、②受け手指定、③与え手指定）のイラストを提示した（図1～3）。参加者は日本語母語話者の大学生11名（日本人学生群）で、視線計測実験では、AOI（関心域）における主要指標として、注視時間を採用し、ヒートマップを作成した。作文データでは、述部の時制や相をコーディングした。結果は、①立場未指定条件では、述部表現として「受け取っている」が約63.6%を占め、視線も受け手領域への注視が相対的に多かった。②受け手指定条件では、「受け取っている」と「受け取った」が同程度に観察され、受け手領域への注視が増加した。③与え手指定条件では、「渡している」「渡した」など、与え手側を主題化する表現が増え、視線は配達員（与え手）領域への注視が増加した。

結論として、本調査では、立場未指定条件では、①自然に受け手に注意が向けられたことと②「受け取っている」系の表現が選択されたことから、日本人学生らが、受け手側の立場に立った視点取得を行ったと判断した。興味深い点として、受け手視点が採られているにもかかわらず、「もらう」表現が選ばれない傾向が見られ、これは配達物という場面文脈に伴う語用論的背景（事務性、感謝表現の不顕在化等）が影響している可能性がある。これらの知見は、日本語教育における授受表現の指導や教材設計に示唆を与えると考えられる。また、本調査で得られた視線データの分析は、言語表現に直接現れない認知的・語用論的前提過程を抽出するうえでも有効な手段である可能性を示す。

視線位置 ヒートマップ			
立場	図1 場面未指定	図2 受け手の立場指定	図3 与え手の立場指定

【参考文献】

佐古恵里香・山内信幸. (2025) 「視線位置と言語化プロセスから見る日本語の自他・授受表現習得に関する 1 考察—日本語母語話者と中国人・ベトナム人学習者の比較分析—」
『2025年度「台湾日本語教育研究」国際学術シンポジウム予稿集』 pp. 155-162.

研究発表

第5分科会 良心館4階 RY424

【後半】14:40~15:10 司会：山崎祐一（長崎県立大学名誉教授・長崎国際大学特任教授）

現実世界に近い英語音声として映画を英語テストに活用する
—mMET『素晴らしき哉、人生！』版を例に—

飯田泰弘（岐阜大学准教授）

本研究では、英語学習者のより実践的な英語力強化につなげるため、背景ノイズを含むなど、現実世界に近い音声を用いた英語教材の開発を目指す。その試みとして、本発表では、牧・和佐田・橋本（2003）が開発した最小英語テスト（Minimal English Test (MET)）を基盤とし、映画『素晴らしき哉、人生！』（*It's a Wonderful Life*, 1946）の会話音声で作成した Movie-MET (mMET) の実験の結果を報告する。

mMET 開発の取り組みはすでにあり、たとえば、飯田（2023）は、映画『レベッカ』（*Rebecca*, 1940）の会話音声で作成した2種類の mMET の得点と大学入学共通テストや TOEIC の得点との間に統計的有意な相関 ($r = .45-67$) が示されたことを報告している。また、Iida（2025）では、2年間にわたり『オズの魔法使』（*The Wizard of Oz*, 1939）で作成した2種類の mMET を調査し、同じく大学入学共通テストや TOEIC の得点との間に統計的有意な相関 ($r = .46-83$) が示されたことを報告している。

また、教材として用いられる英語音声に関しては、先行研究において、教材用の音声は、比較的聞きやすい側面がある一方で（Porter & Roberts, 1981）、映画の英語音声に対しては、英語学習者がより難易度の高さを感じるという報告がある（Fujita, 2017）。

以上を踏まえて、本発表では、『素晴らしき哉、人生！』から、背景ノイズや音声の特徴、会話人数などで異なる特徴を持つ10種類の mMET を作成し、英語力測定テストとして機能するかを調査した結果を報告する。また、複数のバージョンにおいて、TOEIC 得点に対しては、 $r = .60$ を超える相関が示されたことをもとに、新しい英語力測定テストやより実践的な英語力強化につながる英語教材について議論する。

【参考文献】

- Fujita, R. (2017). Comparative analyses of films and textbook materials focusing on the speech rate and the readability, *Teaching English through Movies: ATEM Journal*, 22, 71-84.
- 飯田泰弘. (2023). 「英語力測定テストとして活用する映画：mMET『レベッカ』バージョンを例に」『比較文化論』No. 41, p.48.
- Iida, Y. (2025). Developing the movie minimal English test (mMET): Preliminary study with *the wizard of Oz*. *Journal of English Teaching through Movies and Media*, 23(4), 1-12.
- 牧秀樹・和佐田裕昭・橋本永貢子. (2003). 「最小英語テスト：初期研究」『英語教育』53(10), 47-50.
- Porter, D., & Roberts, J. (1981). Authentic listening activities. *ELT Journal*, 36(1), 37-47.

研究発表

第5分科会 良心館4階 RY424

【後半】15:10~15:40 司会：山崎祐一（長崎県立大学名誉教授・長崎国際大学特任教授）

映像メディア素材の学習者適合性（fit）の検証

—外国語学習におけるポップカルチャーの教育的資源化：JFLのアニメ活用を例に—

松江夏津紀（京都先端科学大学准教授）

本発表は、タイの JFL（Japanese as Foreign Language）学習者を事例とし、外国語教育において、「教材として用いる映像メディア素材をどのような基準で選定すべきか」という問題の理論的意義を明らかにする。選定にあたっては、作品そのものの価値評価のみに依拠するのではなく、学習者との適合性（fit）という観点から捉えることが重要であることを論じ、その条件を明確化した上で、教育的有用性を実証的に検討する。検証には、タイの大学で実施した学習者調査のデータを用いる。目標言語接触に関する実態調査を通して、学習者のメディア利用傾向や興味・関心を分析するとともに、アニメを活用した授業に対する評価調査の結果に基づき、JFL 環境において、映像メディアが教材としてどのような条件のもとで有効に機能し得るのかを考察する。

EFL や JFL などの外国語教育では、TV シリーズや映画といったオーセンティックな映像メディアは、目標言語およびその言語圏の文化を具体的に提示する教材として注目されてきた。近年では、Netflix などの動画配信サービスの普及により、学習者が日常的に目標言語と接触する環境がさらに拡張している。しかし、このような接触機会が存在する一方で、多くの学習者は日常的な視聴を言語学習へと結びつける方略を十分に有しておらず、視聴行為が必ずしも目的意識を伴った学習活動へと転化されないという課題がある。

本研究では、学習者が日常的に接している映像メディアを学習素材として活用することに着目し、教室内の学びを教室外での継続的な学習へと橋渡しする授業回の設定を提案する。ここで鍵となるのが、授業目的に適合した内容を備える映像メディア素材の選定基準である。学習目的に沿った内容を含むことに加え、メディア素材と学習者との適合性（fit）という観点から教材を選定することが重要である。JFL 学習者の場合、日本のアニメが有力な候補となるが、アニメであれば、無条件に教材として有効であるわけではない。学習者の関心や視聴経験、アクセス環境といった条件との適合性が、教材としての有効性に関与する。

調査の結果、タイの学習者は、幼少期から親しんできた長寿作品と配信環境を通じて、同時代的に共有される新作の双方を日本文化に関わる身近な資源として受容していることが判明した。これは、ポピュラー文化の長期的定着と接触のリアルタイム化によって、学習者の内面に豊かな視聴経験が蓄積されている実態を示している。本発表では、こうした受容の特質を基盤とした教材選定の適合性（fit）という観点が、タイの事例にとどまらず、EFL を含む外国語教育一般において、映像メディア素材を教育的資源として活用する際の有効な指標となることを示す。

研究発表

第6分科会 良心館4階 RY425

【前半】12:30~13:00 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

翻訳における動物意象の変容—『紅樓夢』の3訳本の比較分析—

張潔旒（同志社大学大学院博士前期課程）

言語文化の結晶である慣用表現（文化負荷語）は、翻訳において、読者の障壁となりやすい。平井（2022）によれば、これらは、ことわざ、慣用句、故事成語、4字・3字熟語の4層構造に分類される。特に、動物意象を含む慣用表現は、中日両言語間で同一の動物であっても、その背後にある文化や連想が異なる場合が多い。

本研究が対象とする『紅樓夢』は、中国4大名著の筆頭に挙げられ、清朝中期の社会や思想を色濃く反映する。特筆すべきは、他の4大名著と比較しても、その慣用表現の使用数が2270例以上と圧倒的に多く、登場人物の心理描写や性格形成に深く関与している点である。それゆえ、本書は、動物意象の翻訳研究において、極めて重要な資料的価値を有する。

先行研究では、例えば、劉・梁（2024）が、伊藤漱平訳における慣用表現を文化コンテキストの観点から考察している。しかし、既存の研究は、単一訳本のみでの分析が多く、複数の全訳本を横断的に比較し、動物意象全体の変容法則を体系的に解明した研究は、管見の限り、見当たらない。

そこで、本発表では、『紅樓夢』の原文および代表的な3つの和訳（松枝茂夫訳、伊藤漱平訳、井波陵一訳）を対象に、動物に関する慣用表現の翻訳を考察する。Newmark（1988）の翻訳理論における補償（Compensation）の概念を枠組みとし、言語間の差異による意味の損失について、翻訳者が「顕在的」、「潜在的」、「統合的」、「分割的」といった補償ストラテジーを用いて、どのように補完しているかを検証する。さらに、抽出された用例を名詞、動詞、形容詞といった品詞の観点からも分類・整理し、訳文ごとの翻訳傾向の差異を多角的に浮き彫りにする。本研究は、『紅樓夢』という世界文学における動物イメージの深層とその変遷を具体的に解明し、文学作品の異文化間伝播における文化的要素の変容メカニズムに対する理解を深め、比較文学研究に新たな視座の提供を目指す。

【参考文献】

平井一樹. (2022) 「ことわざ、故事成語、慣用句・表現、四字・三字熟語について」『甲南大学総合研究所叢書』第145巻, pp.47-78.

劉小珊・梁曉鵬. (2024) 「伊藤漱平訳『紅樓夢』における慣用表現の翻訳について」『日本言語文化研究』第10巻, pp.67-78.

曹雪芹. 松枝茂夫訳. (1972-1985) 『紅樓夢』東京：岩波書店.

曹雪芹. 伊藤漱平訳. (1996-1997) 『紅樓夢』東京：平凡社.

曹雪芹. 井波陵一訳. (2013-2014) 『紅樓夢』東京：岩波書店.

Newmark, P. (1988) *A Textbook of Translation*. New York: Prentice Hall.

研究発表

第6分科会 良心館4階 RY425

【前半】13:00~13:30 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

Learning Styles and Motivation of Multilingual Learners
—A Case Study of International Students in Japan—

Mo Mo Myint Myat (Student, Aichi University Junior College)

Takayo Sugimoto (Professor, Aichi University Junior College)

Today, many people learn more than one language. However, learning styles and motivation can change depending on the language and the learner's background. This study aims to understand how multilingual learners choose their learning styles and what motivates them when learning different languages.

We conducted a study on multilingual learners (international students) currently living in Japan. Data was collected through an online questionnaire survey and short individual interviews. The results showed that about 70% of the participants preferred an auditory learning style. Many learners used more than one learning style and changed their methods depending on the language and situation. Shadowing, speaking with native speakers, and using videos or audio materials were seen as very effective. Most participants said they were highly motivated, but many also felt that learning several languages was difficult. Motivation was not fixed and often changed based on learning environment, culture, and personal goals.

This study revealed that multilingual learners living in Japan are flexible in their learning styles and motivation. Using different learning methods and giving emotional support could help such learners study languages more effectively.

【References】

- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shirai, Y. (2016). *The Science of Foreign Language Learning: What is the Second Language Acquisition?* Tokyo: Iwanami Shoten.

研究発表

第6分科会 良心館4階 RY425

【前半】13:30~14:00 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

How Do Study Abroad Experiences Reshape Japanese University Students' Self-Expression and Gender Perceptions?—Cultural Dissonance after Return and the Role of English-Medium Reentry Classrooms—

クリストファー・コネリー（京都橘大学専任講師）

This presentation examines how study abroad experiences influence Japanese university students' perceptions of gender norms and their sense of self-expression. The participants were 78 third-year English-major students who had recently returned from studying abroad and subsequently enrolled in a compulsory Advanced Communicative English (ACE) course.

Using a combination of questionnaire data and open-ended responses, the study explored students' perceptions of openness, gender expectations, and cultural adjustment after returning to Japan. The findings indicate that many students perceived their host countries as more open and socially accepting than Japan, particularly with regard to gender roles and self-expression. Female students and those who spent longer periods abroad tended to report greater changes in openness and confidence in expressing themselves.

At the same time, many students experienced cultural dissonance upon returning to Japan, becoming more aware of social conformity and restrictive gender norms that they had previously taken for granted. Increased awareness of gender diversity and LGBTQ+ issues was also a notable outcome of the study abroad experience.

This presentation examines how these changed perspectives are discussed and developed within English-medium reentry classrooms. By examining students' reflections in the ACE course, the presentation considers how post-study-abroad English courses can help students sustain intercultural growth and integrate newly developed identities rather than allowing them to fade after return.

研究発表

第6分科会 良心館4階 RY425

【後半】14:10~14:40 司会：塩田英子（龍谷大学准教授）

翻訳の難所における訳の分岐

—低類似度文分析と翻訳者クラスターによる差異の可視化—

王子涵（同志社大学大学院外国人特別助手）

翻訳の差異は、単なる語彙選択の揺れに還元されるものではなく、翻訳者の多層的判断の総体として生じる。こうした差異は、しばしば特定箇所集中し、翻訳文が大きく分岐しやすい地点を形成する。本研究では、この分岐が顕在化する箇所を「難所」と呼び、テキスト内のどこに集中的に現れるのかについて、データ駆動的分析で特定する枠組みを提示する。

本研究の目的は、魯迅短篇小説の日本語 9 訳を対象として、翻訳文が大きく分岐しやすい「難所」がテキスト内のどこに集中するのかを特定し、その分岐がいかなる翻訳上の判断点に由来するのかを明らかにする。分析対象は、文単位に整備した中日対訳コーパスである。方法として、各文について、翻訳文間の意味類似度を Sentence-BERT (SBERT) (Reimers & Gurevych, 2019) で算出し、低類似度文を抽出する。ここでの低類似度は、「翻訳の良否」を直接示す指標ではなく、同一原文に対して、解釈や再構成が分岐しやすい領域、すなわち、翻訳上の判断点が密集する領域を操作的に指標化したものである。本研究は、この低類似度文を「難所センサー」として位置づけ、抽出例を精査して、差異の生じ方を整理する。その結果、低類似度文は、無作為に散在するのではなく、一定の判断類型へと収束する傾向が観察される。さらに、翻訳者間の語彙・構文的特徴に基づき、翻訳者群を時代別にクラスター化し、難所類型との対応関係を検討する。

本研究は、翻訳差異の記述を例示中心から難所分布の定量化と翻訳規範 (Toury, 1972/2012) へと拡張し、記述翻訳学の方法論的射程を文学翻訳の通時的比較に適用する点に意義がある。また、低類似度文の抽出によって、「訳が分岐する箇所」を再現可能な手続きとして提示することで、翻訳困難性の記述精度を高め、翻訳が担う異文化理解の媒介機能を具体的に捉え直す手がかりを提供する。

【参考文献】

- Reimers, Nils., & Gurevych, Iryna. (2019). Sentence-BERT: Sentence Embeddings using Siamese BERT-Networks, *Proceedings of the 2019 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing and the 9th International Joint Conference on Natural Language Processing (EMNLP-IJCNLP)*, 3982–3992. doi: 10.18653/v1/D19-1410 (accessed 2025-12-17).
- Toury, G. (1995/2012) *Descriptive Translation Studies and Beyond* (Revised edition) . Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

研究発表

第6分科会 良心館4階 RY425

【後半】14:40~15:10 司会：塩田英子（龍谷大学准教授）

英訳万葉集の防人歌についての一考察

林裕二（西南女学院大学教授）

万葉集は、日本最初の歌集であり、全20巻で、7~8世紀の間にうたわれ、作られた長短さまざまな歌4500余首からなる。その中の二つの巻に防人歌が採られている。巻十四に5首、巻二十に93首の合計98首である。万葉集は、天皇から庶民までが詠んだ歌を集めているとされるが、中心となるのは、都の官人（役人）とその関係者である。その洗練された都人たちからすれば、防人歌に見られる、飾ることのない愛情表現や東国方言に惹かれたのであろう。

外国人による個人の英語訳はそれまでにもあったが、最初の組織的な英語訳は、日本学術振興会の *The Manyoshu One Thousand Poems* (1940年) (以下、『英訳万葉集』) で、万葉集から千首を選び、英訳をしている。訳集の出版目的は、日本人自らの手で翻訳を出すことであり、千首選出の三つの基準は、1. their poetic excellence (詩的美点) 2. their role in revealing the Japanese national spirit and character (日本人の国民精神と国民性を示す役割) 3. their cultural and historical significance (文化的、歴史的意義) である。

4500余首から千首の平均的採歌率(22%)からすると、防人歌からの採歌率(35.7%)との差は有意味である。防人歌が英訳に多く選ばれた理由は、三つの基準を満たしていることである。また、歌の配置にも英訳万葉集の編纂意図が反映されている。「防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しき物思ひもせず(巻二十 国歌番号4425)」と4426が、巻二十の他の防人歌とは別に、巻十四の防人歌群に加えられている。その防人歌群は、東歌(あずまうた)の後に置かれている。その2首を除くと、巻二十の歌群が、巻十四の歌群より先に英訳万葉集では置かれている。その2首は、夫婦愛を飾ることなく訴える歌である。

当発表では、まずは、以上を報告し、次に、防人歌から採歌された歌の中で、高校までの教科書で比較的なじみがある歌に焦点を当て、それらが採歌された理由、そして、万葉集とは異なる位置に英訳歌を置く編纂意図を考察する。

【参考文献】

- 伊藤博. (2005) 『萬葉集釋注〈10〉 卷第十九・卷第二十』 東京：集英社。
犬養孝. (2004) 『万葉の旅 中 近畿・東海・東国』 東京：平凡社。
上野誠・鉄野昌弘・村田右富実編. (2021) 『万葉集の基礎知識』 東京：KADOKAWA。
佐佐木幸綱. (2015) 『万葉集』 東京：NHK出版。
中西進. (1981) 『万葉集全訳注 (三)』 東京：講談社。
藤原茂樹. (2013) 『詩歌を楽しむ 藤原流 万葉集の歩き方』 東京：NHK出版。

研究発表

第7分科会 良心館4階 RY414

【前半】12:30~13:00 司会：奥村訓代（北洋大学教授）

気づき焦点化サイクルによる日本語アクセント指導の予備的検証 —中国語母語話者を対象に—

屠晨璽（同志社大学大学院博士前期課程）

日本語教育において、中国語母語話者は単語レベルの発音精度が比較的高い一方、文脈中のアクセント連結、特に、名詞+助詞の接合部（例：箸+を）でピッチの高低が崩れやすい。戸田（2016）は、文中での変化に対応した指導の不足と誤用に気づく機会の乏しさを課題として指摘している。しかし、松崎（2012）のように、習得過程を示した研究はあるものの、通常授業（90分）で継続可能な介入モデルは十分に整備されていない。斎藤（2010）のプロソディ可視化は有効だが、音響分析ソフト等に依拠しやすい。そこで、本研究は、Schmidt（1990）の「気づき仮説」を基盤に、授業内で気づきを意図的に起こし練習へつなぐ「気づき焦点化サイクル（差異認知→言語化→練習）」を構築・実証する。

中国の大学で日本語を専攻する中級学習者（JLPT N2相当）8名を対象に、週1回90分×8週の介入を実施する。期間設定は、砂川（2009）を踏まえ、短期介入の効果と継続条件を観察できるようにする。各回の授業は、①差異入力（母語話者モデル提示）、②自己産出（ロールプレイ録音）、③気づき深化（録音再生+手描きピッチ比較シートで差異を視覚化）、④焦点練習（ターゲット文節反復、支援を漸減）、⑤振り返り（短い記述）の5段階で構成する。教材には、箸／橋／端等の最小対立と名詞+助詞（を／が）文を用い、下がり目の位置と接続部の高低に焦点化する。手描きピッチ比較シートは、斎藤（2010）の「差異の可視化」を教室で再現可能な形に簡略化したもので、即時フィードバックを可能にする。

データは、(A) 介入前後および授業内の録音、(B) 振り返り記述、(C) 授業観察メモを収集する。発話の変化は聴感評価で捉え、振り返り記述は、内容分析により、「気づき」の変化（例：位置特定→理由づけ→修正方略）を整理する。少人数の利点を活かし、結果（発話）と過程（気づき記述）を対応づけて検討することで、短期介入における「気づき」と産出改善の関与を明らかにする。成果は授業案・指導シートの形で共有可能な形で提案する。

【参考文献】

- 赤木浩文. (2022) 「初中級日本語学習者に対する日本語の発音教育—意識化と気づきを活用した授業の報告—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第24・25合併輯, 119-136.
- 斎藤純男. (2010) 『日本語教育音声学』東京：くろしお出版.
- 砂川有里子. (2009) 「短期集中指導における発音改善の可能性」『日本語教育』142, 45-58.
- 戸田貴子. (2016) 『コミュニケーションのための日本語発音教育』東京：アルク.
- 松崎寛. (2012) 「中国語話者における日本語アクセント習得の縦断研究」『音声研究』16(3), 88-99.
- Schmidt, R. (1990). "The role of consciousness in second language learning," *Applied Linguistics*, 11(2), 129-158.

研究発表

第7分科会 良心館4階 RY414

【前半】13:00~13:30 司会：奥村訓代（北洋大学教授）

日本文化の理解を目的とした書道ワークショップの設計と実践
— 日本的学習プロセス「守破離」の体験的理解に着目して—

森岡千廣（関西大学大学院博士後期課程）

本発表は、タイの大学に在籍する日本語専科学生を対象に、日本文化への理解の深化を目的として設計した書道ワークショップ（以下、WS）の構成と実践を通して得られた知見について報告するものである。

本実践では、書道を日本の「道」文化の一つとして捉え、そこに内包される精神的成長や学びの在り方（守破離）の体験的理解に注目する。筆者は、こうした「道」文化に特徴的な概念を理解することが、より深い日本文化への理解につながると考える。

「守破離」の概念について、原（2018）は、源（1989）を参考に以下のようにまとめている。「型を守ることで芸の基本を身につける学習の段階」（守）、「学習の段階が深まることで生じる型との葛藤を経て、習得した型を破ろうとする」段階（破）、「そして習得した型に即していながらも、型にとらわれない自由な表現が可能となった段階」（離）からなる熟達の過程を示す枠組である（源, 1989 ; 原, 2018, p.106）。

守破離のような抽象度の高い概念を体験的に理解するための理論的背景として、本実践では、Kolb（1984）の経験学習モデルを参照する。このモデルは、学びを具体的経験・省察・概念化・再実践からなる循環的過程として捉え、経験が内省や意味づけを通して概念理解へと転化されるプロセスを重視している。このモデルに基づき、松井・森岡（2025）は、海外の日本語学習者を対象としたWSとして、①文化的概念の提示、②体験活動、③内省・言語化という学習プロセスを提案している。本WSは、この構成を参照しつつ、「守破離」という日本文化の理解に焦点を絞り、そのための体験活動として、書道を位置づけた点に特徴がある。

本実践の具体的な構成は、①「道」文化としての「書道」の説明、②守破離の概念的導入、③「守」に焦点を当てた型の体験および表現活動、④振り返りとディスカッションからなる。このプロセスを通して、学習者が「守破離」という概念をどのように受け取り、どのような理解を形成するのかを検討する。

【参考文献】

原みなみ. (2018). 「『守破離』からみるバレエ・ダンサーの成長—「形」から「型」の習得へ—」『人間文化創成科学論叢』21, 105-113.

Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the source of learning and development*. Hoboken, NJ: Prentice Hall.

松井夏津紀・森岡千廣. (2025). 「ポップカルチャーから伝統文化へ：文化理解と言語習得をつなぐ学習プロセスの提案」『比較文化研究』161, 67-77.

源了圓. (1989). 『型：叢書身体の思想 2』東京：創文社.

研究発表

第7分科会 良心館4階 RY414

【前半】13:30~14:00 司会：奥村訓代（北洋大学教授）

オーストラリア研修に見る学生の英語学習意欲の変化に関する一考察

東本裕子（横浜商科大学教授）

本発表は、2週間にわたるオーストラリアでの海外研修と日本での事前講義への参加の前後で履修学生の英語学習意欲や異文化に対する意識と行動にどのような変化が見られたかについての実践報告である。

海外研修は、学生の語学力や異文化コミュニケーション能力を向上させる効果が高いと言われ、コロナ禍で一時中断したものの、近年、再び多数の大学で様々な語学研修プログラムや海外インターンシッププログラム等が提供されている。筆者の勤務校では、1年あるいは半年の長期交換留学制度の他に、夏や春の休暇期間を利用した2週間の短期国際理解研修がアメリカ、オーストラリア、中国の各海外提携校と実施されている。これらの短期研修は選択科目の一つであり、週1回の事前授業を8週間と現地研修2週間を合わせ、「異文化交流と国際理解」科目として位置付けられている。

アメリカと中国への短期研修では、各大学の寮で日本人学生同士が2週間同室に宿泊し、安心感がある一方で、現地の方との交流が限定される傾向にある滞在スタイルとなっているが、オーストラリアへの短期研修は、ホームステイ滞在となっており、現地の大学での授業時間以外でもホストファミリーとの会話で英語を使う機会が多く、渡航前の不安要素に繋がる可能性が高い一方で、異文化を実際に体感出来る場面にも恵まれていることが学生間で人気の一要因となっている。また、現地での授業参加に関しても、他の2カ国と異なり、オーストラリア研修においては、日本人学生が1つの教室に固まるスタイルではなく、事前授業の中で実施する英語力テストの結果によって各学生の英語力に応じたESL (English as Second Language) クラスに振り分けられ、他国からの短期語学研修参加生の他に移民を中心とする履修生と席を並べることによって、より多くの異文化接触機会を設けるスタイルとなっている。なお、英語力テストは、提携校から指定されたBritish CouncilによるEnglish Level Testを使用し、CEFRの段階別にクラス分けを行った。

筆者は、本研修担当者として、日本における事前授業とオーストラリアでの現地研修を引率し、共に過ごした期間の中で、参加学生の英語によるコミュニケーションへの意欲の変化やそれに伴う学習姿勢の主体性伸長を観察した。今年度は、参加学生14名の内、1年生が8名と例年より若い学年の履修生が多く、全体的に、最初から英語力向上への意欲のみならず、国際的な事柄への興味、関心が高い印象であった。

学生の英語レベルは多様であったが、全員に共通して見られた現象として、英語を使用して話す際に、日本語を使用している時と比べて、積極的且つコミュニケーションに意欲的な様子が観察された。また、研修後のインタビュー調査の結果もまとめ、次年度以降の研修プログラムや通常授業の内容考案に役立てたい。

研究発表

第7分科会 良心館4階 RY414

【後半】14:10~14:40 司会：東本裕子（横浜商科大学教授）

『時をかける少女』に関する一考察 —筒井康隆から細田守へ—

杉岡歩美（京都橘大学専任講師）

『時をかける少女』は、一九六五年に学習研究社『中三コース』一月号に掲載された筒井康隆の小説である。タイムスリップをモチーフにしたこの作品は、一九七二年のNHKドラマ『タイム・トラベラー』をはじめ、一九八三年の大林宣彦監督による映画『時をかける少女』、一九八五年のフジテレビドラマなど、現在に至るまで数多く取り上げられ、描き直されてきた。上記に記載した作品は、いずれもタイムリープ能力を持った女子中学生・芳山和子を中心に据え、男子同級生二人との関係、なかでも深町一夫との淡い恋とその別れを描いている。

本発表では、それらの作品と二〇〇六年に公開された細田守監督のアニメーション映画『時をかける少女』との比較を中心に行い、細田守作品の特徴を再検討する。

まず、細田守の作品では、芳山和子は、主人公・紺野真琴の叔母として登場しており、従来の作品とは展開が異なっていることに着目する。

つぎに、「少女」の描き方についても確認する。江藤（2001）は、『時をかける少女』における「少女」像の変遷をまとめ、一九九四年版を除く多くの「和子」が、永遠の「少女」、「少女にとどまる少女」であり、「待つ女」型である点を指摘している。アニメ版も、結末部において「未来で、待ってる」との言葉が用いられており、その型を踏襲しているといえる。しかしながら、筒井版の「芳山和子」が「母性愛過多」と表されるのに対し、細田の描く「少女」は、「ピッチャーマウンドで大きく振りかぶる、本篇の主人公、紺野真琴」と絵コンテに記述されるように、快活な少女として登場する。さらに、細田版のキャッチコピーは、「待ってられない 未来がある。」であり、従来の「待つ女」から逸脱している様が指摘できる。

このように、筒井版と細田版では、主人公の差異や「少女」像の差異など、さまざまな差異が存在する。本発表では、それらをまとめたうえで、〈食表現〉の差異にも注目し、分析を加えていく。筒井作品には、〈食表現〉はほとんど描かれず。具体的には、「朝食をとっていた」との文章のみであるが、細田は、桃やプリン、アイスクリームなど〈食表現〉を重要なツールとして多用する。たとえば、妹に食べられたプリンを取り戻すためのタイムリープからは、真琴の「個人」的な欲望が見て取れよう。

では、細田は、なぜ〈食表現〉を追加したのか。本発表では、こうした具体的な比較分析を通し、細田守の『時をかける少女』における表現方法を追究したい。

【参考文献】

江藤茂博. (2001). 『『時をかける少女』たち』 東京：彩流社.

研究発表

第7分科会 良心館4階 RY414

【後半】14:40~15:10 司会：東本裕子（横浜商科大学教授）

臨時的な四字漢語動名詞の自他性についての考察

—複合語内部と文中機能との乖離を中心に—

陳志文（台湾・国立高雄大学教授）

本発表は、臨時的に形成される四字漢語動名詞（〈二字漢語〉＋〈二字漢語〉）を対象に、①複合語内部（前項—後項間）の自他性と②当該四字漢語が文中で「する」を伴い述語化する際に示す自他性（ヲ格許容性・主語の性質）とを比較し、その一致／不一致が生じる条件を明らかにする。資料は、BCCWJを用い、中納言により抽出した45,406件からノイズ除去後に1,200例を無作為抽出して分析した。

内部統語関係に基づき、主語—述語、目的語—述語、副詞—述語、複合述語、連体修飾—被修飾の5類型を設定する。

自他性の決定には類型差があり、「主語—述語型」という類型は、四字漢語動名詞全体がすでに完結した概念を表しており、目的語を必要としない。そのため、このタイプの動名詞は、すべて自動詞的な用法に属する。副詞—述語型では、後項の動詞的要素の自他性に依存する（後項依存）。複合述語型では、前項の自他性が全体を規定し（前項依存）、複合動詞に近い振る舞いを示す。

とりわけ、本発表が強調するのは、内部自他性と文中自他性の「不一致」である。目的語—述語型は、「ご飯を食べる」のように、すでに一つの完結した概念事項を表しているため、大部分は自動詞的な用法に属する。要するに、内部では「XをYする」の他動的関係（例：気分転換＝気分を転換）をもつが、文中では、「美容院で気分転換してきて下さい」のように、目的語を取らない自動詞的な用法として定着しやすい。

一方で、内部に目的語を抱え込む語でも、文脈により外部目的語が導入され、他動化する例がある。例えば、「資本注入」は、本来、「資本を注入する」だが、「公的資金を資本注入する」は、「公的資金を資本として注入する」と再解釈され、文中自他性が内部自他性と乖離する。

以上の不一致は、(i)前項が「目的語の取り込み」を起こして、ヲ格を飽和させる場合（自動詞化）と(ii)文脈により前項が手段・様態等に転換され新たな目的語が導入される場合（他動詞化）に類型化できる。四字漢語動名詞を「複合語内部の関係」だけでなく、「文中機能」と併せて捉えることで、四字語彙の生成性と統語的振る舞いを統一的に説明し、漢語系語彙の自他性教育（ヲ格の可否・省略）への示唆も提示する。

今後の課題としては、各類型の出現頻度と使用文脈の照合による談話的機能の検証、自他動詞性の境界が曖昧な事例における語用的要素の分析、他言語との対照研究による普遍的特徴と日本語固有性の抽出などが挙げられる。さらに、こうした知見を日本語教育や自然言語処理（NLP）への応用につなげることで、「臨時的四字漢語」の語彙的・構文的特質をより体系的に理解する道が開かれるであろう。

研究発表

第8分科会 良心館4階 RY415

【前半】12:30~13:00 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

中国人日本語学習者における原因・理由と逆接の接続助詞の習得
—テ形の過剰使用に注目して—

龔歆蔚（同志社大学大学院博士前期課程）

中国人日本語学習者（Chinese learners of Japanese、以下、CJLと言う。）を対象とした研究では、原因・理由を表す際にテ形が多用されることが観察されている（田代, 1995; 陽・川嶋, 2009; 吉田, 1994）。先行研究では、言語内要因から、テ形の過剰使用を説明しているが、日中対照研究では、中国語の複文には、原因・理由だけでなく（新田, 2004）、逆接についても、関連詞を用いない表現が存在することが指摘されている（李ら, 2014）。このように、中国語では、関連詞なしでも論理関係を表しうるため、CJLは、日本語の複文を産出する際、母語に直接対応する接続助詞を見出しにくく、結果として、意味解釈の幅が広く、かつ、早期に習得されるテ形に依存する傾向が生じる可能性がある。本発表は、この点に着目し、CJLにおける原因・理由と逆接の接続助詞の習得を母語転移の視点から検討する。

本発表では、日本語版と中国語訳の小説から200文を収集した独自コーパスを作成し、中国語訳における接続表現の付加の必須性に基づいて、「有標」（接続表現の付加が必須なもの）、「(有標)」（接続表現の有無が選択的なもの）、「無標」（接続表現の付加が不要であり、付加すると不自然になるもの）の3種類を設定する。この枠組みを用いて、①日中対応関係の特徴を記述し、母語転移の観点から、CJLの習得実態を推測することと、②異なる習得段階のCJLを対象に、原因・理由と逆接の接続助詞の使用実態を考察し、テ形の過剰使用に着目して、その誤用の原因を明らかにすることを研究課題とする。

本調査に先立ち、小規模な予備調査として、N2レベルの学習者を対象に、3分類にまたがる2文統合課題を実施した結果、対象者の再設定や課題文の調整の必要性が確認された。これらを踏まえて、本調査では、テ形の過剰使用と母語転移の関係をより包括的に検証する。

【参考文献】

- 田代ひとみ. (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85号, pp.25-37.
- 新田小雨子. (2004) 「順接型の接続助詞「から」と中国語の相当表現の対照研究」『早稲田大学日本語教育研究』4号, pp.145-158.
- 陽際元・川嶋秀之. (2009) 「中国人日本語学習者に見られる〈～て（で）〉の誤用について」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）』58, pp.1-11.
- 李光赫・張北林・林樂青・王楠. (2014) 『複文における日中対照実証的研究』広州：世界図書出版会社.
- 吉田妙子. (1994) 「台湾人学習者における『て』形接続の誤用例分析—『原因・理由』の用法の誤用を焦点として—」『日本語教育』84号, pp.92-103.

研究発表

第8分科会 良心館4階 RY415

【前半】13:00~13:30 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

中国人日本語学習者における話し言葉の「たり」の習得実態とその問題点 —I-JAS コーパスに基づく日本語母語話者との比較により—

李雨点（名古屋大学大学院博士前期課程）

「たり」は、教科書では、主に、「～たり～たり」の形で、複数の事態の中からいくつかの例を挙げるといふ例示の用法と反対の動作や状態を繰り返すという用法が扱われている。一方、母語話者の実際の使用において、教科書に載せていない単独使用も多く見られると指摘されている。山内（2014, 2015）では、「たり」の使用頻度を調査したところ、話し言葉では、並列使用より単独使用の方が多いということが指摘されている。また、中俣（2010）では、文型別の使用頻度を調べた結果、話し言葉では、「P たりする」の使用が最も多いということが考察されている。これらの用法においては、母語話者に比べて、学習者の使用頻度が低いと予想される。

先行研究では、母語話者の使用実態が調査されてきたが、学習者の使用実態はまだ明らかにされていない。そこで、本研究では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』から、話し言葉における中国人日本語学習者と日本語母語話者の使用実態と比較しつつ、中国人日本語学習者の「たり」の習得における問題点の考察を行う。

「たり」の用法について、日比（2009）は、先行研究を踏まえ、「例示」、「不定」、「繰り返し」、「暗示」、「ぼかし」、「冗談」の6つにまとめている。中俣（2010）は、形式によって、「P たり Q たりする」、「P たり Q たり」、「P たり Q」、「P たりする」、「P たり」に分類している。本研究では、以上の分類を参考に、I-JAS の発話データを用い、中国人日本語学習者と日本語母語話者の「たり」の使用を意味および形式から再分類を試み、その異同を分析する。その結果、特に、「暗示」用法などの単独使用において、中国人日本語学習者と日本語母語話者の使用頻度に差が見られることが判明する。また、このような違いが生じる原因の1つとして、母語転移という視点から、「たり」の日中対応関係の考察に基づいて、中国人日本語学習者と日本語母語話者の「たり」の使用が異なる用例を用いて分析を試みる。

【参考文献】

- 中俣尚己. (2010) 「現代日本語の「たり」の文型—コーパスから見るバリエーション—」『無差』(17), pp.101-113.
- 日比伊奈穂. (2009) 「「たり」の用法に関する考察」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』(7), pp.17-28.
- 山内美穂 (2014) 「「並列」機能を持つ助詞の談話による働き—「単独」用法に着目して—」杏林大学博士学位申請論文.
- 山内美穂 (2015) 「会話で単独使用される「たり」—なぜ「たり」で「可能性」や「意外性」が表せるのか—」『日本語教育』162 巻, pp.82-96.

研究発表

第8分科会 良心館4階 RY415

【前半】13:30~14:00 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

フィクションを教材としたリーディングの授業を通した
日本人英語学習者の語用論的推論能力伸長に関する一考察

橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

大学英語教育におけるフィクションを教材としたリーディングの授業では、多読を通して学習者のリーディングにおけるボトムアップ処理の自動化を到達目標とする場合が多い。しかし、これに対して、Hall（2005）などは、フィクションのリーディングの授業を通して、学習者の語用論的推論能力の伸長が期待されると指摘している。ただし、Bouton（1994）が指摘するように、非英語母語話者は、語用論的意味を見逃しやすいため、理解を偶発的な獲得に委ねるのではなく、明示的な指導によって、語用論的意味の解釈力の向上を図る必要がある。拙稿（2025）は、フィクションを教材としたリーディングの授業において、受講生が物語の内容理解を行う際に、「いつ」、「どこで」、「だれが」、「なにをしている／していた」および「登場人物の態度・感情」を整理する「あらすじシート」を用いた活動を導入した。このあらすじシートは、Zwaan et al.（1995）が提唱する状況モデルに基づいており、物語理解に必要な状況情報の統合を促すものである。また、「登場人物の態度・感情」の項目では、Gumperz（1982）が提唱する文脈化の合図としての非言語描写は、登場人物の心的状態の推論へと結びつけるメタ認知的な活動を促している。本研究では、このような「あらすじシート」を用いた登場人物の言動に対する明示的な分析アクティビティが、学習者の語用論的推論能力にどのような影響を与えるかを検討する。そのため、授業実践の前後でプレテスト・ポストテストを実施する計画である。これらのテストでは、Zwaan et al.（1995）の状況モデルおよび Gumperz（1982）の文脈化の合図の理論に基づき、発話内容と非言語行動が一致または不一致となる状況を設定することで、学習者が単なる言語情報の処理を超えて語用論的推論を行っているかを測定することを目指す。

【参考文献】

- Bouton, L. F. (1994). Can NNS skill in interpreting implicature in American English be improved through explicit instruction? A progress report. *World Englishes*, 13(2), 157–170.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, G. (2005). *Literature in Language Education*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- 橋尾晋平. (2025). 「大学生のコミュニケーション能力の育成を目指した物語文を教材としたリーディング授業の新提案」『比較文化研究』160, 77–86.
- Zwaan, R. A., Magliano, J. P., & Graesser, A. C. (1995). Dimensions of situation model construction in narrative comprehension. *Journal of Experimental Psychology: Learning, memory, and cognition*, 21(2), 386–397.

カタカナ語に対する意味把握に関する調査報告
—「流行」の意味合いを担う複数の語の場合—

大谷鉄平（北陸大学准教授）

カタカナ語は、語種としては、主に、外来語の表記として用いられるとともに、表記面でのイメージから、ある語に対するニュアンスが付与される。一方、JLPT（日本語能力試験）における「言語知識」では、カタカナ語のうち、外来語に関する出題が行われている。つまり、日本語学習者にとっては、カタカナ語は、単に原語と同じものではなく、意味機能やふるまいにおける差異を踏まえたうえで把握することが求められる。

本発表では、カタカナ語のうち、外来語、特に、「流行する・人気を博す」との意味合いを担う5つの語に関し、日本人学生ならびに留学生（主に中国人留学生）を対象とし、簡単な例文を作成してもらおうという方法で、これらの語に対する最も接近可能な意味をどう捉えているのかに関する調査を行った結果を報告する。具体的には、1)「ブレイク」、2)「ブーム」、3)「トレンド」、4)「ファッション」、5)「モード」の5語を提示したうえで、思いつままの短い例文を作成してもらった。そのうえで、目視による回答結果の観察ならびに KH Coder を用いたテキストマイニングにより、日本人学生ならびに留学生が当該5語の意味をどのように把握しているかを探索した。

本発表に際し、発表者は、事前に1)~3)の語に関しては、各々の意味機能ないしふるまい上の異同に関し、見出し文ならびに BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）を言語資料とした調査・分析に基づく考察を提出している。²また、カタカナ語での諸特徴が原語（この場合は英語）に起因するものであるか否かに関し、2)、3)については、OED (2nd edition)での辞書記述ならびに英語コーパス COCA (Corpus of Contemporary American English) を用い、カタカナ語の場合との対照を行った。³そのうち、後者では、カタカナ語「トレンド」の意味機能やふるまいは、原語 trend に比し、fashion に近いとの結果を得ている。ただし、4)の「ファッション」と原語 fashion との間でも差異が認められる。加えて、ファッション関連の流行については、5)の「モード」も想起されるが、「機内モード」、「戦闘モード」といった「体勢」の意味合いとの接近性についても、検討の余地がある。本発表での報告が、カタカナ語研究や日本語教育に資するものであれば、幸甚である。

¹ 先行研究からは、主に、「知的、新しい、やわらかい、明るい、若々しい、優雅、ファッションナブル…」というプラスイメージが指摘されている。

² 「語義」面、「(流行の)対象となる事物の傾向」面、「文脈や言い回しの傾向」面、「アスペクト・語形成」面の4つの観点から、各々の語に関する特徴を記述している。大谷鉄平(2025)「BCCWJにおけるカタカナ類語「ブレイク」「ブーム」「トレンド」—ふるまいと意味機能の解明に向けて—」(『比較文化研究』160, pp. 13-26)ならびに大谷鉄平(2025)「見出し文におけるカタカナ語「トレンド」の様相—日本語コーパスとの比較を中心に—」(『北陸大学紀要』59, pp. 203-217)などを参照されたい。

³ 「原語 boom からみるカタカナ語「ブーム」(日本比較文化学会 2025 年度関西支部、中国・四国支部、九州支部合同例会、2025 年 12 月 6 日、同志社大学)ならびに「「流行」を意味するカタカナ語と原語について—「トレンド」と、trend と fashion の場合—(日本比較文化学会 2025 年度九州支部大会、2026 年 1 月 24 日、鹿児島国際大学)」。

研究発表

第8分科会 良心館4階 RY415

【後半】14:40~15:10 司会：橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

生成 AI における関連性理論に基づく推意プロセスの検証と語学教育への応用

高橋栄作（高崎経済大学教授）

2022 年後半以降、生成 AI (LLMs) は、教育現場を含む多岐にわたる分野で不可欠な存在となっている。Hudeček and Dušek (2023)は、LLMs が対話を通じて自己修正を行う柔軟性を備えている点を指摘した。Ohashi et al. (2025) らは、語学教育において、多角的な活用事例を紹介した。一方で、利用者の意図を過度に汲み取る懸念も報告されている (Petrov, Dekoninck and Vechev 2025)。高橋・宇佐美 (2025) は、ポライトネス理論の観点から、LLMs の対話能力を評価した。今後、より円滑なコミュニケーションシステムの構築には、文脈依存性の高い「推意」の理解に関する検証が不可欠である。

そこで、本研究では、Sperber and Wilson (1986, 1995) の関連性理論に基づき、LLMs が発話の非明示的意味に相当する「推意プロセス」を適切に処理・理解できるかを検討することを目的とした。

検証には、関連性理論における表意（明示的意味）と推意（非明示的意味）の概念を用いた。具体的には、発話の背後にある意図（例：「暑い」という発話から「冷房をつけてほしい」という意図が含意されている）を含む複数の隣接対を LLMs に入力し、その文脈理解と意図の推論能力を分析した。

分析の結果、LLMs は文脈情報（例：翌日の早起が必要な状況）を考慮し、否定の明言がない発話 例：Peter: Would you like a cup of coffee? Mary: It keeps me awake. (東森・吉村 2003, 9) から、正確に「No」という意図を導き出すことが確認された。検証したほぼ全ての事例において、LLMs による推意が可能であった。

本研究の結果は、LLMs が高度な語用論的推論能力を有することを示唆している。これは、LLMs を活用した Chatbot が、言語習得支援においてより自然な対話パートナーとなり得ることを意味する。さらに、ハイコンテキストとローコンテキストの差異を含む、異文化コミュニケーションの分析ツールとしても活用できる可能性が示された。

【参考文献】

- Hudeček, V., & Dušek, O. (2023). *Are LLMs all you need for task-oriented dialogue?* arXiv. <https://doi.org/10.48550/arXiv.2304.06556>
- Ohashi, L., Hillis, M., & Dykes, R. (Eds.). (2025). *Artificial intelligence in our language learning classroom*. Candlin & Mynard. <https://doi.org/10.47908/38/i>
- Petrov, I., Dekoninck, J., & Vechev, M. (2025). *BrokenMath: A benchmark for sycophancy in theorem proving with LLMs*. arXiv. <https://doi.org/10.48550/arXiv.2510.04721>
- Sperber, D., & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition* (2nd ed.). London: Blackwell.
- 高橋哲朗・宇佐美まゆみ. (2025). 「大規模言語モデルによるポライトネス理論の検証」『言語処理学会第 31 回年次大会発表論文集』 pp.1443-1448.

研究発表

第9分科会 良心館4階 RY416

【前半】12:30~13:00 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

語義指導による語彙的複合動詞の意味推測

—「抜く、切る、通す」を例として—

蘇沫涵（同志社大学大学院博士前期課程）

中国における日本語教育の現場では、教科書に登場する動詞は、単純動詞が中心であり、複合動詞を体系的に扱う機会は限られている。しかし、複合動詞は、実際の日本語使用場面において、高頻度に用いられ、暗記による習得には限界があるため、意味推測能力の育成が必要である。発表者が中国人日本語学習者を対象に行った事前調査では、「抜く」を後項とする語彙的複合動詞において、意味推測の正答率が、特に、低い傾向が見られた。姫野（1999）は、「抜く、切る、通す」をいずれも「完遂」を表す複合動詞に分類しており、これらは、多様な前項動詞と結合し、意味拡張の幅が広いという共通点を持つことを指摘していて、そのため、学習者にとっては、意味推測が困難になりやすいと考えられる。一方、これまでの研究では、語義体系の整理は進められてきたものの、基本義と拡張義に基づく語義の明示的指導が意味推測の正確さにどの程度寄与するのかについて、教育的観点からの実証的検証は十分とは言えない。

そこで、本発表は、「抜く、切る、通す」を対象とした語義の明示的指導が、語彙的複合動詞の意味推測の正確さに与える影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、語義の明示的指導が意味推測の正確さにどの程度寄与するのかを明らかにするとともに、指導後も推測が困難であった語について、語構造や意味拡張パターンの観点から困難の要因を分析する。研究方法は、BCCWJを用いて、「抜く、切る、通す」を後項とする語彙的複合動詞を抽出し、『複合動詞レキシコン』に基づいて、語構造別に分類する。意味体系は、姫野（1999）および杉村（2008、2012、2013）を基盤とし、学習者に利用しやすい形へ再整理する。研究対象者は、中国語を母語とする日本語学習者60名を統制群と実験群に分け、実験群には、テスト前に語義の明示的指導を行い、短い文脈の中で意味推測課題を実施する。

実験の結果、語義の明示的指導により、実験群の意味推測の正答率が統制群より高まることが予測される。後項動詞の基本義と意味拡張の流れを明示することで、学習者が文脈への過度な依存を減らし、語義に基づいて、未知の複合動詞の意味を推測できるようになり、さらに、動詞ごとの意味拡張特性により、指導効果にも差が生じることを主張する。

【参考文献】

- 杉村泰. (2008). 「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7, 63-79.
- 杉村泰. (2012). 「コーパスを利用した複合動詞「V1—通す」の意味分析」『言語文化論集』34(1), 47-59.
- 杉村泰. (2013). 「コーパスを利用した複合動詞「V1—抜く」の意味分析」『言語文化論集』35(1), 49-63.
- 姫野昌子. (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房.

研究発表

第9分科会 良心館4階 RY416

【前半】13:00~13:30 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

多文化共生社会における「文化の発信主体」としての外国人住民
—フィリピンにルーツを持つ千葉県市川市長期在住者による実践—

董航（環太平洋大学講師）

本研究は、多文化共生を「在住外国人への支援」から、「外国人住民が自らの文化的背景を活かし、地域社会に対して能動的に発信・貢献する」という双方向的な関係構築のプロセスとして再定義することを目的とする。

この実証の場として、千葉県市川市を選択した理由は、同市が（1）人口に占める外国籍住民の割合が全国平均を上回るなど多様性が顕在化しており、（2）「多文化共生」を政策的に掲げる一方で、住民同士の実質的な交流を生む具体的な仕組みが模索されているという典型的かつ先進的な課題を抱えた場であるためである。また、文化発信の主体としてフィリピンにルーツをもつ長期在住者に着目したのは、（1）日本におけるフィリピン籍住民は、歴史的に定住化が進み、地域社会への統合の次の段階にあること、（2）舞踊、音楽、言語など、体験型ワークショップに適した有形無形の文化的資源が豊富であることが主要因である。

本研究は、多文化共生の実践が、外国人住民を支援の「客体」として捉えるのではなく、彼らが持つ文化的知識と経験を地域の共有資源（アセット）として位置づけ、発信の機会を創出することを通じて、より深い相互理解と地域の活力を生み出すという仮説に基づく。この仮説を検証するため、フィリピンにルーツを持つ講師が主体となり、地域住民に向けて自国文化を「舞踊」、「言語」、「音楽」、「物語」の四側面から伝える連続ワークショップ「Feel the Philippines」を企画・実践しており、その効果を参加者へのアンケート及び講師への聞き取り調査によって検証している。

本発表は、第一回「舞踊」、第二回「言語」が実施済みの時点での中間報告である。現段階の予備的分析からは、参加者側の文化への親近感の深化と講師側の「地域貢献者」としての新たなアイデンティティの萌芽が観察される。今後、全四回の実践を通じて、この「文化発信型共生モデル」が、参加者の地域への包摂感、講師のエンパワーメント、そして地域社会の文化的活力に、いかに寄与しうるかを明らかにしていく。最終的には、外国人住民の潜在的力を解放し、多様性が創造性の源泉となる地域社会の構築に向けた、具体的なプログラムデザインの原理を提案したい。

【参考文献】

厚生労働省.「地域共生社会の実現に向けた取組と課題について」. 2024年6月27日.
<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001273364.pdf> (閲覧日：2026年1月21日)

市川市総務部ダイバーシティ推進課.「市川市多様性を尊重する社会を推進するための指針」.
2024年5月17日. <https://www.city.ichikawa.lg.jp/common/gen05/file/0000457370.pdf> (閲覧日：2026年1月21日)

研究発表

第9分科会 良心館4階 RY416

【前半】13:30~14:00 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

留学中の異文化コミュニケーションによる大学生の自己主張に対する認識の変化
—北米に留学した京都橘大学国際英語学部の学生の事例—

樋口ゆかり（京都橘大学専任講師）

一般的な講義における現在の大学生の多くの反応は、活気がなく、リアクションが薄い。彼らは、わからないことがあっても質問しない。彼らは、目立ちたくなく、その他大勢の一員となることで安心するので、授業中にほめられることを嫌う。金間（2022）によると、これらには、2つの心理状態が関係している。第1に、ほめられることを嫌う学生の多くは、自己肯定感が低い。彼らは、基本的に「自分はダメだ」と思っており、人前でほめられることを「プレッシャー」として受け取る傾向がある。第2に、彼らは、ほめられることによって、自分という存在の印象が強くなってしまうこと（≒自分だけがなんらかの利益を得る状態）を怖がっている。彼らの目立つことに対する抵抗感は絶大である（金間, 2022）。

京都橘大学国際英語学部の学生も、留学前においては、前述の例に漏れず、自己主張しない傾向が強い。本学部の教員の多くが、1年生の教室で、「何か質問はありませんか？」という問い掛けの直後に来る不気味なほどの静けさを経験している。これは、本学部の1年生が、自発的に質問することが目立つことだと考えているせいだろう。静けさの原因は、また、彼らが自分で決められない・提案できないということにもあるだろう。この傾向が強い学生は、名指しで質問されると、狼狽えて、回答する前に、忙しなく隣り合う学生の顔をうかがい、相談しようとする。彼らは、自分の考えをまとめるよりも先に、ほかの学生がどう考えているかが気になり、それに反することを怖がって、察した結果に従おうとする。しかし、2年生時の留学を経験すると、彼らの多くが、自己主張に対する認識を変化させていく。

本発表は、京都橘大学国際英語学部の学生が、2年生時の留学中の異文化コミュニケーションを通して、自己主張することへの認識をどのように変化させていったかを、報告するものである。彼らは、留学中、「現地での生活を通して自分がどのように変化したか」を表す3本のエッセイを時系列に提出することが義務付けられている。本発表は、それらの内容をコード化し、グルーピングと構造化を通して、検証したものである。

本発表のフォーカスは、彼らが自身の臆病さを自覚し自己主張の重要性を認識するに至ったプロセスである。ゆえに、自己肯定感が低くなってしまった原因については、個人差もあることから、直接的に究明することは避けている。

【参考文献】

金間大介. (2022). 『先生、どうか皆の前でほめないで下さい』 東京：東洋経済新報社.

Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000). Self-Determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being, *American Psychologist*, 55(1), 68-78.

研究発表

第9分科会 良心館4階 RY416

【後半】14:10~14:40 司会：郭潔蓉（東京未来大学教授）

宇宙生命観と日蓮主義の交錯
——生命主義的救済観からみた西川満の宗教思想——

黄耀儀（台湾・文藻外語大学助理教授）

西川満（1908–1999）は、日本統治期台湾において活躍した代表的な日本人作家の一人であり、民間文化・民間信仰を題材とする作品を数多く残した人物である。戦後、西川は、台湾で「天上聖母」あるいは「天后」として信仰される媽祖に強い関心を抱き、日本において宗教組織「日本天后会」を創立した。

筆者は、これまで、日本天后会の天上聖母信仰にみられる宇宙観を、日本の新宗教に通底する思想的特徴として指摘されてきた「生命主義的救済観」の視点から検討してきた。その結果、西川が構想する天上聖母と星辰を中心とする宇宙生命観は、宇宙の根源を万物に内在する生命として捉える生命主義的世界観と高い親和性を有することが明らかとなった。

しかし、西川の宗教言説を詳細に検討すると、彼が天上聖母信仰を説明する際に、日蓮の教説や生涯をしばしば参照し、さらに、田中智学や高山樗牛といった近代日蓮主義者の言説を積極的に援用していることが確認される。こうした点は、西川の宗教思想が単なる台湾由来の媽祖信仰の受容にとどまらず、日本近代宗教思想、とりわけ、日蓮主義的言説との接続のもとで再構成されている可能性を示唆する。

そこで、本発表では、生命主義的救済観の視点をを用いて、西川満の日本天后会における天上聖母信仰と日蓮観の関係を再検討する。とりわけ、「神と人間」の関係をめぐる宇宙生命観の構造に着目し、日蓮の教説および田中智学の日蓮主義との比較を通して、西川の宗教思想の思想的基盤を明らかにすることを目的とする。これにより、西川満の宗教活動を、日本近代宗教思想と新宗教研究の交差点に位置づける新たな視座を提示したい。

研究発表

第9分科会 良心館4階 RY416

【後半】14:40~15:10 司会：郭潔蓉（東京未来大学教授）

国家的祝祭空間におけるキャラクターの意味変容 —身体性と受容の再編成をめぐる—

関口英里（同志社女子大学教授）

国家規模で開催される祝祭的イベントは、その開催主旨を実現し、外交的にも重要な意味を持つ文化装置である。いっぽう、一般参加者の体験をめぐる消費文化論的視点に基づけば、それは単なる娯楽や観光資源にとどまらず、参加者の感情や身体経験、意味理解を再編成する公共的な〈場〉として機能する。さらにいえば、そうした〈場〉においては、消費を喚起し、人々とイベントを媒介し、その関与をさらに醸成する核となる「メディア的存在」、すなわち、「キャラクター」が重要な鍵を握ることとなる。本発表では、そうした国家的祝祭空間において、キャラクターが果たす役割に注目し、キャラクターそのものの分析ではなく、祝祭的な文化装置が作用するメカニズムを比較文化的視点から考察することを目的とする。

近年の大規模イベントや非日常的な〈場〉においては、公式キャラクターが広く導入され、視覚的な象徴としてだけでなく、来場者との接触、撮影、反復的遭遇といった身体的経験を媒介する存在となっている。キャラクターは祝祭空間において、意味を一方向的に伝達する記号ではなく、感情や受容を調整・転換する装置として機能する点に特徴がある。本発表では、理論的枠組みの精緻化を主眼とするのではなく、キャラクターが祝祭空間の中でどのように「作動」しているかに分析の焦点を置く。

具体的事例として、万博という国家的祝祭空間におけるキャラクター受容の過程を取り上げる。とりわけ、2025年の大阪・関西万博において、開催前後において賛否や違和感を伴って受け止められたキャラクターが、会場という限定された〈場〉の中で反復的に経験されることにより、感情的意味を変容させていく過程を検討する。ここで重要となるのは、キャラクター単体の属性やデザインではなく、祝祭空間が提供する公共性、身体的接触の機会、集団的経験の蓄積といった条件である。

あわせて、比較分析軸を浮かび上がらせるための照明として、五輪の公式キャラクター、テーマパークにおける象徴的キャラクター、大手企業による有名国産キャラクターやご当地キャラクターと公共イベントの関係などを参照点として簡潔に言及し、個別事例の差異ではなく、国家的・公共的祝祭空間と共通する条件が、文化を越えてキャラクター受容を方向づけている点を示す。

本発表は、いわゆるキャラクター研究や特定の学術理論に深く根差した議論とは一線を画し、祝祭という〈場〉とキャラクターの関係性に注目することで、感情・身体・意味の再編成をめぐる文化装置としての社会的メディアイベントを捉え直す試みである。国家的祝祭空間におけるキャラクターの意味変容を通じて、比較文化研究における新たな分析視点を提示したい。

特別講演

16:00~16:50 良心館 RY104

司会：山内信幸（同志社大学教授）

郷育を鍵にした地域創生スキームの実装 —岡山県真庭市北房地区での10年間の調査・研究・実践—

津村宏臣（同志社大学教授）

本講演は、2016年以降、岡山県真庭市北房地区で継続してきた郷育実践を基軸とする地域創生スキームの理論的構築と実装過程を検討するものである。本実践は、文化遺産を保存対象とする従来型文化財行政を再考し、それを人と知識の【関係を媒介する社会装置】として再定義する点に特徴を有する。

理論的背景として、デューイの経験の再構成論、ブルーナーの発見学習論、ヴィゴツキーの協働的発達理論、フレイレの批判的教育論を参照し、郷育を知識伝達ではなく、「地域を説明できる主体の形成」を目的とする教育実践として位置づける。文化資本論の観点からは、制度化された文化資本（文化財）を身体化された文化資本（地域主体）へ転化させる媒介として教育を捉え、主体形成を循環構造として設計する必要性を示す。

加えて、本実践（もう実践ではなく、実践）は、内発的発展論を日本の地域社会における「文化的自己記述」の問題として再定義する試みでもある。内発的発展を地域内部資源の活用という経済的枠組みに限定せず、地域が自己の歴史・記憶・経験をいかなる枠組みで語り直すかという認識構造の問題として捉える。本実践では、発掘・展示・教育活動を通じて、散在する地域知を再編し、外部評価や制度的権威に依存しない自己記述の言語を生成することを重視する。郷育は、その媒介装置として、制度化された文化財を地域主体によって再解釈される文化遺産へと転換する過程を担う。この意味で、【北房モデル】は、内発的発展論を文化的自己理解の再編成として具体化する教育的実践と位置づけられる。

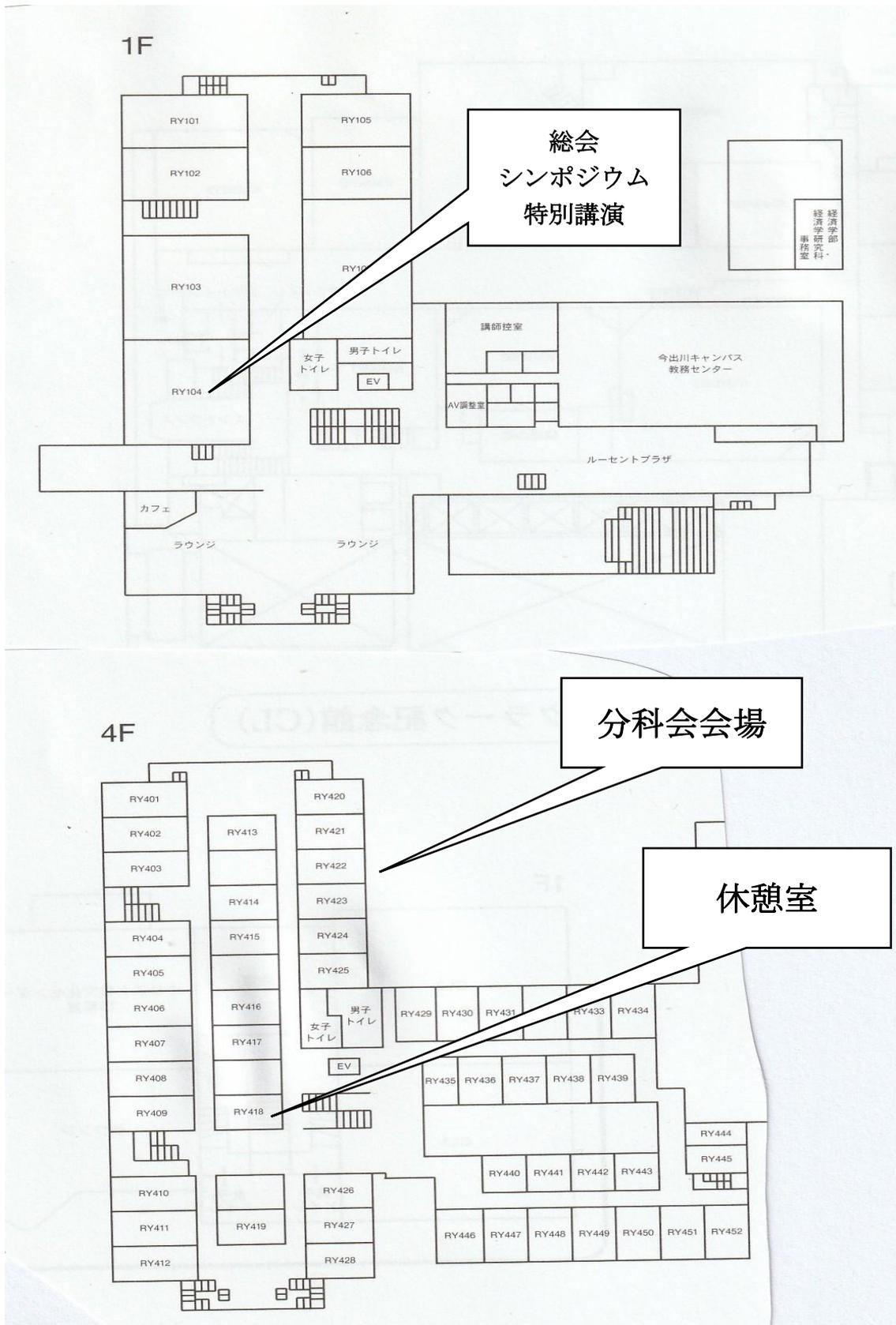
具体的には、公民館講座や荒木山西塚古墳の調査を契機とし、小・中学校の総合的学習と大学生との協働を複数年接続した。参与観察、インタビュー、商品開発、展示設計、動画制作へと展開し、成果物をフォーラムで可視化・社会化する設計を採用した。さらに、マーケティングのダブルファネル概念を導入し、学習成果を地域内外への発信戦略として再構成することで、文化資源の社会資源化を試みた。本スキームは、創造—連結—可視化—資源化—経営—制度化—組織設計—倫理という循環構造として整理される。重要なのは、外部人材投入型施策とは異なり、外部主体を循環内部に組み込み、知の地域内還流を前提とする点である。ここでは、外部と内部の対立を超え、関係構造そのものを設計対象とする。

北房における10年間の実践は、文化遺産政策を教育を中核とした主体形成型政策へ再編する可能性を示すものである。地域創生の持続可能性は、事業量や来訪者数ではなく、「地域を語り直す主体」の形成度に依存する。本講演は、比較文化的観点から、地域社会が自己をいかに記述しうるかという問題系に対する一つの実証的応答として、【北房モデル】の構造と課題を提示して、本学会での議論の端緒としたい。

《同志社大学今出川キャンパス》



《良心館》1階・4階



比較文化論 No. 44

発行：日本比較文化学会

発行日：2026年5月23日

本部事務局：

〒731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1

広島工業大学工学部環境土木工学科 風早悟史研究室内

日本比較文化学会第48回全国大会・2026年度国際学術大会準備実行委員会（事務局）：

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

京都橘大学国際英語学部 北林利治研究室内

印刷：

株式会社田中プリント

〒600-8047 京都府京都市下京区石不動之町677-2